



SOCIETY & VALUES

映画産業の今



THE MOVIE BUSINESS TODAY

U.S. DEPARTMENT OF STATE / BUREAU OF INTERNATIONAL INFORMATION PROGRAMS

E ジャーナル U S A
(2007 年 6 月米国務省発行電子ジャーナル)

映画産業の今

編集主幹	ジョージ・クラック (George Clack)
編集長	リチャード・W・ハッカビー(Richard W. Huckaby)
製作部長	クリスティアン・ラーソン(Christian Larson)
製作部長補佐	シルビア・スコット(Sylvia Scott)
ウェップ・プロデューサー	ジェニン・ペリー(Janine Perry)
編集者	ロビン・L・イエーガー(Robin L. Yeager)
寄稿編集者	キャロリー・ウォーカー(Carolee Walker)
編集補助	マーティン・J・マニング(Martin J. Manning)
参考文献スペシャリスト	ロザリー・ターゴンスキ(Rosalie Targonski)
写真編集	マーティン・J・マニング(Martin J. Manning)
表紙デザイン	アン・モンロー・ジェイコブズ(Ann Monroe Jacobs) ミン・ヤオ(Min Yao)
編集委員会	ジェレミー・F・カーティン(Jeremy F. Curtin) ジョナサン・マーゴリス(Jonathan Margolis) チャールズ・N・シルバー(Charles N. Silver)

e-Journal USA
社会と価値観
2007 年 6 月 第 12 卷 第 6 号

米国務省国際情報プログラム局は、eJournal USA のロゴで、5 種類の電子ジャーナル——「経済的展望」「地球規模の問題」「民主主義の問題点」「外交政策の指針」「社会と価値観」——を発行している。これらのジャーナルは、米国と国際社会が直面する主要な問題を検証し、米国の社会・価値観・思想・制度について考察するものである。

ジャーナルは、月に 1 度、まず英語版で発行され、その後、フランス語・ポルトガル語・ロシア語・スペイン語でも発行される。アラビア語、中国語、ペルシャ語版については、一部、特選号として発行している。それぞれのジャーナルには「卷」と「号」が記してある。

このジャーナルで表明されている意見は、必ずしも米国政府の見解や政策を反映するものではない。また米国国務省は、ジャーナルの内容や、ジャーナルがリンクしているインターネット・サイトへのアクセス保全について、責任は一切負わない。責任はすべて、当該サイトの発行者にある。ジャーナルの記事、写真、挿絵について、米国外で複製・翻訳することは認めら

れるが、記事に著作権規定が明示されている場合はその限りではない。規定がある場合、ジャーナルに記されている版権所有者の許可を得て使用しなくてはならない。

米国務省国際情報プログラム局は、以下のサイトに、ジャーナルの最新号とバックナンバーを複数の電子フォーマットで掲載しているほか、発行予定表も載せている。

<http://www.america.gov/>

ジャーナルへの意見は、各国の米国大使館、あるいは、以下のジャーナル編集室まで寄せられたい。

Editor, eJournal USA
IIP/PUBJ
U.S. Department of State
301 4th St. S.W.
Washington, D.C. 20547
United States of America

E-mail: eJournalUSA@state.gov

カバー写真

劇場: ©2007 Jupiterimages Corporation

2005年アカデミー賞授賞式におけるスカーレット・ヨハンソンの挿入写真:

©AP Images/Kevork Djansezian

EジャーナルUSAの本号では、観客と映画製作との双方で進む国際化や、近年増加しつつある個人的スタイルの独立系映画製作、米国における外国映画のマーケット、映画の製作や配給に与えるインターネットとデジタル革命の影響について分析する。このほか、補足記事で、若い才能を育てるサンダンス映画祭などの映画祭や、映画会社が映画をつくる際に取り組んでいる環境問題にも焦点を合わせる。

目次

本号について

編集部

米国映画の米国的なものとは何か？

トーマス・ドハティー（ブランディーズ大学映画研究科教授）

米国の映画産業は、一部で批判はあるにしろ、相変わらず映画の世界マーケットに君臨し続けている。ここではその理由を論じ、最近米国の内外で大きな反響を呼んだいくつかの作品について語る。

フィールド・オブ・ドリームズ：米国のスポーツ映画

デービッド・J・ファイアスタン（米国務省東アジア局）

最近のスポーツ映画（「タイタンズを忘れないで」「プライド 栄光への絆」「コチ・カーター」その他）は米国の価値観について何を語っているか。

米国の外国映画ラッシュ

ティモシー・コリガン（ペンシルベニア大学映画研究科科長）

米国内における外国映画事情の発展をたどる。

米国の映画祭

キャロリー・ウォーカー（米国務省国際情報プログラム局）

映画への新しい関心が映画祭や映画製作者を支える。

補足記事

興行成績のデータ

若い映画製作者たちのフォト・ギャラリー

若い国際的映画製作者たちが、今、映画界で頭角を現している。俳優もいれば監督やプロデューサーもいるが、ほとんどは2つ以上の役割を兼ねる。

独立系の台頭

ケネス・トゥラン（ロサンゼルス・タイムズ映画評論担当）

独立系映画への観客の評価が高まったことにより、独立系映画業界の育成と発展が可能になった。

補足記事

- ・サンダンス映画祭——世界の独立系映画製作者の活動を応援

- ・リビングルームの映画祭

デジタル革命

スティーブン・アッシャー（ドキュメンタリー映画監督・作家）

映画監督が新しい奇抜なタイプの映像を作るために初めてデジタル技術を使ったのは、1980年代のことだった。それ以来、映画に使われる機器はますます高度化し、映画の製作、マーケティング、配給のデジタル化が可能になった。

環境保護に取り組むハリウッド
ロビン・L・イエーガー（米国務省国際情報プログラム局）
ハリウッドの環境保護運動について述べる。

補足記事
政府と映画

補足情報

参考文献

役に立つウェブサイト

VIDEO FEATURE

「インディペンデント・レンズ」
米国および外国の映画製作者による独立系映画のシリーズ。P B S（公共放送サービス）を通じて米国の視聴者に紹介された。

「トゥルー・ストーリーズ」
米国内で製作された独立系映画のシリーズ。海外放映用に提供されている。

本号について——ブロックバスターを超えて

今は亡き映画監督リチャード・ブルックスは、かつて、「まずイメージが浮かび、そのイメージと最初に反応するのは、例えば音楽などと同じように、感情である」と語った。この言葉が核心をついていることは、ハリウッド方式で製作される映画が100年以上にわたり世界中できわめて高い人気を誇っている事実を考えれば明らかだ。グローバリゼーションの時代にあって、感情に訴える映画の力はさまざまな文化を軽々と横断し、ハリウッド映画を米国的主要輸出品のひとつにしている。

映画は、暗闇にいる観客にジェットコースターのようなスリルを味わわせるだけの、単なる娯楽ではない。「映画産業の今」という本号のタイトルが示すように、米国の映画はひとつの産業として見ることができる。明白な事実でありながら見逃されがちなのは、映画は何よりもまず、熾烈を極める市場で成功するか失敗するかが重要だという点だ。人々は金を払ってこの映画を見にきてくれるだろうか？ 大物プロデューサーが、映画の企画を考えるときに自問するのはこうした現実的な問題であり、それこそが米国の映画を理解するための鍵となる。

とはいっても、映画製作は単なるビジネスでもない。それは、俳優、監督、脚本家などギャラの高い「才能ある人々」から、セットをつくり、照明を当て、スターにメーキャップを施す技術スタッフに至るまで、1本に数百人を要する高度な共同作業の芸術形式なのだ。

結局、どんな形式の大衆文化でもそうであるように、映画にはもっと重要な価値観が含まれている。映画製作者は必然的に、映画づくりに不可欠な数百の選択肢から選んだ価値観を作品に埋め込んでいる。こうした価値観がはっきりとしたテーマやメッセージの形を取って表現されたことはめったにない。それよりも、あらゆる映画製作者たちがやろうと努力すること、すなわち観客を引きつけようとする潜在意識が結果として現れる場合の方が多い。

では、最近の米国映画の米国的なものとは何か？ よく知られているがややステレオタイプな答えは「ブロックバスター」、つまり、世界中でチケットを売り、大きな利益を生み出す超大作映画である。ブロックバスターというと、普通、1億ドル以上の予算を投じ、興行的に実績のあるスターを起用したアクション映画かスリラー映画を連想する。主役のスターは、筋骨たくましく頭脳明晰で大胆不敵なヒーローを演じる。ヒーローは困難に立ち向かい、多くの文明を脅かそうと計画している極悪非道な悪者をやっつけなければならない。観客はブロックバスターに、プロットの突然の逆転や、綿密に練られた追跡シーンや、すさまじい大爆発を期待することができる。その一方、ブロックバスターは、登場人物や社会的背景をあまり深く掘り下げたり、普通の人の生活をリアルに描いたりはしないかもしれない。

2007年のアカデミー賞授賞式で、俳優のウィル・スミスは違う意見を述べた。「米国映画の中に見出される共通の特徴、米国映画を米国的なものとして際立たせている共通の特徴は、そういうものは存在しないということだ。米国そのものと同じように、米国映画もそれぞれ異なる。立ち上がってわれわれに声援を送る映画もあれば、われわれを笑いの種にする映画もある。われわれのために歌う映画もあれば、われわれのために泣く映画もある。しかし、どの作品も、われわれがどんな人間であるかを、つまり、われわれが社会的、政治的、宗教的な違いを通して進化する国民であることを、世界に伝える」

ここでスミスは、一般的に米国と関連づけられる価値観を強調している。ひとつは、この国はまだ成長の途中にある未完成品で、その政治体制は国が自らの理想に向かって進んでいくことを許容しているという考え方。2つ目は、多様性、すなわち多種多彩な層から成る米国人の多様性を称揚すること。このほか、イノベーション、起業家精神、楽観主義、創造性、異文化に対する寛大さ—しばしば移住という形を取る—などの価値観は、ハリウッドの映画産業を見れば容易に指摘できる。

EジャーナルUSAの本号を発行する目的は、米国映画が、ブロックバスターという固定観念から想像されるよりはるかに豊かで多彩であることを読者に知ってもらうためである。本号の各記事は、絶えず変化している産業を的確にとらえ、観客と製作者の両方の観点から見た映画産業の国際化の進行や、最近の独立系映画製作に台頭してきたより個人的なスタイル、米国内における外国映画のマーケット、映画の製作・配給のあり方に与えたインターネットおよびデジタル革命の影響を分析する。補足記事では、若い才能を育てるサンダンスなどの映画祭や、映画会社の環境保護への取り組みに焦点を当てる。フォト・ギャラリーでは、熾烈な競争が繰り広げられているハリウッドで、評価を高めつつある若手の脚本家、監督、プロデューサー、俳優たちを取り上げる。

というわけで、リチャード・ブルックスが言ったように、ハリウッド映画は21世紀に入った現在も、膨大なイコノグラフィーと感情の宝庫を提供し続けている。米国の映画評論の長老リチャード・シッケルに言わせれば、「米国映画の伝統は、常に、知性の上と知性の下で作用してきた」のである。

編集部

米国映画の米国的なものとは何か？

トマス・ドハティー

批判はあるにしろ、米国の映画産業は世界の映画市場に君臨しつづけている。著者はここでその理由や、最近米国の内外で大きな反響を呼んだいくつかの作品について語る。トマス・ドハティーはマサチューセッツ州ボストン近郊にあるブランダイス大学映画科の教授。著書に「*Projections of War: Hollywood, American Culture, and World War II*」(1999)、「*Teenagers and Teenpics: The Juvenilization of American Movies in the 1950s*」(2002)など数冊。



米国映画、とりわけジョン・フォード監督の古典的西部劇の舞台に使われたモニュメント・バレー。
©AP Images/The Daily Courier, Jerry Jackson

「米国人は私たちの潜在意識を植民地化してきた」とヴィム・ヴェンダースの「さすらい」(1976)の登場人物は、賛美と不満の入り交じった口調で言う。このせりふは、ドイツ人監督によるロードムービーの中で言われるからこそうなずける。ヴェンダースが初の米国ロケで真っ先に撮影したのは、ハリウッドの名匠ジョン・フォードがしばしば自作の舞台に使ったユタ州モニュメントバレーだった。

映画大国に対するヴェンダースの愛憎半ばする姿勢は、「植民地人」に共通する感情を表しており、それと同じ感情を「宗主国」の国民が持つこともある。アメリカンドリームのさまざまな素材を鮮やかに描いてみせるハリウッドの才能については議論の余地はないかもしれないが、米国人以外の映画ファンにとって、この「洗脳」は不快なものでしかない。カンヌ映画祭で毎年、最高賞のパルム・ドールに輝く可能性が高いのは米国製の反米映画だ、というジョークが映画ファンの間でささやかれるのも無理はない。その完璧な見本がマイケル・ムーアの「華氏 911」(2004)だ。

DVD の海賊版やユーチューブによる映像の氾濫にもかかわらず、20世紀の米国的价值觀を大量生産し大型スクリーンで誇示する拠点となるハリウッドは、21世紀もマーケットを支配しようとしている。米国の自動車産業の拠点であるミシガン州デトロイトは、トヨタ（日本）、ジンデルフィンゲン（ドイツ）を拠点とする自動車メーカーに敗北したが、大衆娯楽産業の王者としてのハリウッドの地位は揺るぎない。米国的なものが優位に立つ理由のひとつは、例えば個人主義、行動の自由、上昇志向、幸福の追求（エロスでも金でも）、力強く世直しするヒーローなど、まばゆいばかりの宝物が詰まったパッケージというハリウッド本来の魅力かも

しれない。しかし、長い歴史を持つ 20 世紀フォックス、ワーナ・ブラザース、MGM などの映画会社は、今、自動車産業が取らなかつた方法で繁栄している。新しい市場の動きに適応し、ライバルを迎えて入っているのだ。現在のハリウッドの製品ラインは、外国仕様で生産されるだけでなく、組み立ても外国人技術者の手で行われている。

国際的な影響

エンターテインメント業界紙「バラエティー」によると、一般的にハリウッド映画の興行収入の半分以上は国外の切符売り上げによるものだという。国外での収益が国内での収益をはるかに上回ることも多く、各国でヒットした「007／カジノ・ロワイアル」「ダ・ヴィンチ・コード」などは 70% 以上にも達している。つまり、辛らつな外国人の目には最悪の輸出品としてしか映らないような、ばかばかしい悪ふざけや荒唐無稽なプロット、派手な爆発シーンは、国内ではなく全世界の観客をごそりすくい取ろうとするハリウッドの手法から生まれている。物語の因果関係、重層的な性格描写、次々に繰り出される気の利いたせりふなどが複雑に絡み合っているよりも、ほとんど字幕を必要としないシンプルで先の読める筋立て、目をくらませる視覚効果、そつけないなり声のようなせりふ回しの方が広く伝わる——シンガポールからセネガルに至る観客が、アメリカの十代の若者の購買傾向にそっくり重なるのも、これが理由だ。

もちろん、ハリウッドは外国に作品を売り込む国際企業として、常に外国の観客を意識してきた。映画が撮影スタジオだけで製作され、作品がすべて「メード・イン・アメリカ」だった黄金期にあっても、すべて米国向けというわけではなかったし、それより肝心なことは、すべて米国人によってつくられたというわけでもないことだ。当時も現在と同じように、国産と外国産の要素の比率は一様ではなかった。国内育ちと外国生まれの影響がどのように競い合うかは作品ごとに違うからだ。それらの要素が混じり合い、競い合っていたことは、看板に書かれたスターや監督の名前を見ても明らかだった。ハリウッドは金で手に入る有能な外国人に対しては偏見を抱かなかった。1920 年代と 1930 年代はドイツやイギリスの監督が、ルイス・メイヤーやデービッド・セルズニックなどの米国の映画プロデューサーが提示する金額の前に屈伏した。最近では、メキシコ人や台湾人の映画製作たちが、マジックのようなテクノロジーや莫大な製作費の誘惑に乗りやすいことが証明されている。要するに、米国映画を最も米国的としているものは、米国的でないものが積極的に取り入れられていることかもしれない。

毎年末に出るその年に封切られた映画リストを見ると、ハリウッドは長い間、分け前にあづかろうとする才能豊かな外国人の象徴的入り口として、「エリス島」の役割を果たしてきたことがよくわかる。2006 年の作品はとりわけ、アカデミー賞に値するものもそうでないものも、外国勢のサクセス・ストーリーの豊かな見本を並べたような壯觀さだった。それは映画や映画産業の「同化パワー」を証明するもので、どんなに米国に深く根ざしている作品でも、オープニング前のクレジットタイトルに米国的な名前が出てくるとは限らないのである。例えば、次のような作品がある。

「ディパーテッド」

マーティン・スコセッシが得意とする米国ギャング研究の最新成果である本作品には、さまざまルーツが入り混じっている。香港の犯罪サスペンス映画「インファナル・アフェア」

(2002) を甘い言葉で包み込んだこのリメーク版は、イタリア系米国人であるスコセッシが、ハリウッドのスターを起用し、ボストンのアイルランド系に設定を変え、「ミーン・ストリート」(1972) 以来の特徴であるアドレナリン全開タッチで表現した。実際にボストン出身のマット・デイモンとマーク・ウォルバーグをキャスティングして、特徴的なボストンなまりでしゃべらせ、ボストンで撮影されたこの作品は（カナダの都市を米国の大都会に見せかけて撮るのが普通であるのに、本物らしさにこだわる魅力は決して小さくはない）、ボストンという狭い地域の物語を全米的なもの、そして（外国で大ヒットしたことから判断しても）世界的なものにした。映画は高く評価され、2007年、アカデミー賞の作品賞と監督賞に輝いた。



ミュージカル「ドリームガールズ」でアカデミー賞助演女優賞を受けたジェニファー・ハドソン。

©AP Images/Fritz Reiss

「ドリームガールズ」

舞台は一足飛びに、米国の音楽産業の本拠地として知られるデトロイトへ。ブロードウェイのヒット作をビル・コンドンが映画化し、ハリウッドのスタジオならではの演出が施された過剰で仰々しいミュージカルが大画面いっぱいに繰り広げられる超大作になった。フィクションのベールの裏に実話がはっきりと透けて見えるこの作品は、公民権運動の時代背景を盛り込みつつモータウン・レコードとザ・シュプリームスを思わせる女性グループの誕生と成長を描き、ラジオのトップ40入りの「費用対効果」について教えてくれる。米国人の耳には、この成功物語の裏にある通奏低音が、サウンドトラックと同じようにリズミカルに響いて聞こえる。テレビの「アメリカン・アイドル」という番組で2004年に優勝できなかったジェニファー・ハドソンが、音楽の競争の場である映画の「ドリームガールズ」でブレークし、本物のアメリカン・アイドルに変身したのだから。この年は、米国的なノリのあるミュージカルが豊作だった。家族向けの「ハッピーフィート」は、コンピュータ・アニメのペンギンがロックに合わせて踊りまくりながら環境意識を植えつける、言ってみればアル・ゴアのドキュメンタリー「不都合な真実」の子供版だ。

「リトル・ミス・サンシャイン」

同じ年に公開された映画のなかで最も子供を中心にしていながら、ひどく大人っぽく仕上がった。共同監督を務めたジョナサン・デイトンとバレリー・ファリスはヴィム・ヴェンダースとは異なり、ハックルベリー・フィンやジャック・ケルアック、ハリウッドの一連のロードムービーに着想を得て、機能不全に陥った家族をポンコツのフォルクスワーゲンのバンに乗せ、

新たな土地に向かわせる。こうした作品の常として、重要なのは目的地（もちろん、カリフォルニア）よりも、旅と旅の参加者たちだ。美少女コンテストに出場する少女、独自の成功論を説いてまわるものの人生の失敗者である父親、ヘロイン好きの祖父、疎外されたインテリ男と疎外された十代の若者、そして妻として母親として彼らをまとめあげる女。米国では大きな人気を呼んで愛された作品だが、国外ではふるわなかつた。ハリウッドは、きわめて効率のいい「G P S（全地球位置発見システム）」を完成させたかもしれないが、世界中に広く受けるということは均質化しているという意味でもある。せりふが多かったり、その土地特有の表現だったり、その国独特のテーマだったりすると、外国では利益をあげにくい。すべての超大作が熱心に追い求める万国共通のスローガン「ノンストップのジェットコースターエクスペリエンス！」に磨きをかけていく方がいいのかもしれない。

「プラダを着た悪魔」

海外市場でより健闘したのは、ローレン・ワイスバーガーの小説をデービッド・フランケルが映画化したコメディーメロドラマ。ファッショナブルこのうえないシンデレラストーリーだが、シンデレラといつてもガラスの靴をはいているのではなく、一流デザイナーのドレスで身を固めている。アン・ハサウェイ演じる前途洋々の純情な若い女性は、大画面のステージをおしゃれに、カッコよく、美しく闊歩する。一方、メリル・ストリープ演じるやり手のファッショングループ編集長は、映画評論家ロビン・ウッドが「ローズバッド症候群」と呼んだ悲しい運命に耐えている。つまり、アメリカといえども富と名声は心と人格が伴わなければ不完全で、金の亡者は「市民ケーン」（1941）のチャールズ・フォスター・ケーンのように、無垢な子供時代を恋しがりながら孤独のうちに死んでいくのだ。

「父親たちの星条旗」「硫黄島からの手紙」

クリント・イーストウッドがハリウッド史上例を見ない賭けに打って出た野心的2部作。2つの独立した作品が同じ物語を敵対する両陣営の視点から描いている。時期を少しずらして公開された2本は、年末に有名映画批評家たちが選ぶ「その年のベストテン映画」の上位にランクインしたが、どちらも米国の観客には受け入れられなかつた。米国人にとって第2次大戦は聖域で、無益だったかとか、道徳的に見合う価値があったかを論じるものではなく、常に褒めたたえるべき出来事なのだ。

皮肉というか当然というか、外国生まれのアーティストのほうが、米国を象徴する俳優で監督のイーストウッドよりも、正確に米国人の心情を読み解いたりする。船から降り立ったかつての移民のように、彼らも母国の伝統を携えてはきたが、地元の言葉をたちどころに覚え、作品的にも商業的にも高い評価を勝ち取つた。

「クイーン」

ステイブン・フリアーズによるこの現代のコスチューム劇が米国で成功したのは、長年にわたる米国人の英王室に対するあこがれを反映している。しかし、「あなた方の痛みがわかります」と訴えかける民主的な理念（トニー・ブレア首相）と、君主として感情を表に出さない威厳（エリザベス2世）との対立は、それぞれがダイアナ妃の死を受け止めていくうち、最後には予期せぬ親しい関係を生み出すことになる。女王の伝統的なストイシズムは、セレブリティ文化によって安易に流される涙よりもすがすがしいものだという意外な発見がある。

「ユナイテッド93」

多くの米国人にとって、あの年に起こった最も強烈で悲痛な出来事を映画化したのもイギリス人だ。飛行機のコックピットを舞台にしたポール・グリーングラスのこのサスペンス映画は、2001年9月11日のテロ攻撃を詳細に描いた初の長編映画だった。ローテクで、リアルタイムで事件を伝えるように描かれたドキュメンタリー風のこの作品は、スターの力を借りる必要もなく米国民の心を直撃した。米国内の映画館で「ユナイテッド93」を見るのは、腹部にパンチを連打され、「死を忘れるな」という身の引き締まるような言葉を突きつけられることと同じだったが、このインパクトは国外の映画館では伝わらなかったのではないだろうか。

「ボラット 栄光なる国家カザフスタンのためのアメリカ文化学習」

お上品とされるイギリスからやってきた野卑で下品極まりないこの男についての議論を抜きにしては、米国映画界における外国の仕事人たちの影響を十分に語ったとはいえない。これは罷をしかけて挑発する工作者サシャ・バロン・コーベンが、東海岸（ニューヨーク）から西海岸（女優でモデルのパメラ・アンダーソンを探して）まで、昔の開拓者が通った伝統的道筋をたどる、ねじくれたロードムービーなのだ。アレクシス・ド・トクビル〔アメリカの民主主義について書いたフランスの思想家〕とまったく同じとはいえないが、コーベン演じる無知なキヤラクターも、最終的には、やはり米国人がこれまで気づかなかつた自分たち的一面を見てくれる。それはつまり、米国人には、最も耐えがたい外国人を限りなく受け入れる寛容さがあるということだ。

「パンズ・ラビリンス」「バベル」「トゥモロー・ワールド」

3人のメキシコ人監督（ギジェルモ・デル・トロ、アレハンドロ・ゴンザレス・イニヤリトウ、アルフォンソ・キュアロン）はそれぞれ、悪夢のような過去、出来事が絡み合う現在、ユートピアではない未来をテーマとして、注目度抜群の3作品を生み出した。思わず幸運を掘り当てる彼らの才能は、ハリウッドに外国人が浸透していることを最も如実に物語っている。娯楽メディアから「スリー・アミーゴス」と呼ばれている3人組は、うわべが派手で明るい楽観主義に満ちた米国のメインストリームの作品に、絵画のような質感と悲劇的な感覚、つまり、最後にはヒーローたちが死んでしまうとか、世界は人間の介入を受けつけないほど悪意に満ちているといった、国境の南の厳肅さを持ち込んだ。

2006年に公開された米国映画や外国映画のうち、多言語・多国籍によるハリウッドの未来を最も的確に予言しているのは、タイトルとは矛盾するが、「バベル」かもしれない。この映画には、異文化の混合が配役や製作、ロケ地（モロッコ、カリフォルニア、メキシコ、日本）、感性に見事に生かされている。外国人もハリウッドと同じやり方で報いながら、米国映画を植民地化しているといえるだろう。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を表すものではありません。

フィールド・オブ・ドリームズ: 米国のスポーツ映画

デービッド・J・ファイアスタイルン

スポーツなら何でも歓迎という米国人のスポーツ好きを反映して、映画製作者たちは、ストーリーそのものよりずっと重要なメッセージを伝えるために、たびたびスポーツという題材に目を向ける。デービッド・J・ファイアスタイルンは、現在、米国務省アジア太平洋局に所属する外務担当官。これまで3冊の著作と約130本の記事を発表しているほか、国立モスクワ国際関係大学(MGIMO)、テキサス大学(オースティン)、ジョージ・メーソン大学(バージニア州フェアファックス)で教鞭を取ったことがある。



「マーシャルの奇跡」でコーチのひとりを演じるマシュー・フォックス。この映画は、アメリカン・フットボールの大学チームが、1970年に選手およびコーチ75人を飛行機事故で失ったあと再建に取り組むという実話に基づいている。©AP Images/Rick Feld

米国ほどスポーツ——あるひとつのスポーツではなくスポーツ全般——が国民の生活に浸透している国はない。あつたとしてもごくわずかだろう。スポーツは米国人の生活や会話や語彙の基本構造の一部であり、国の大切な指導者たちが国事について語るのに、例えば「マリアさま頼みのパスを投げる（アメフトで終了直前に運を天に任せてエンドゾーンへロングパスを投げる）」とか、「ダンクショートで（確実に）得点する」とか、「硬式野球をする（強硬に振る舞う）」とか、「ベルトの下を打つ（反則を犯す）」といったように、スポーツの隠喩を借りるのが日常茶飯事になっているほどだ。さらには、米国の核爆弾発射に必要な暗号が入っている大統領の黒い小型の書類かばんは「フットボール」と呼ばれている。

米国人の生活に占めるスポーツの重要性は、現代の米国映画にたっぷり盛り込まれている。米国の映画会社はこの数十年間、米国映画史上最も刺激的かつ感動的で胸が躍るような忘がたい映画の何本かを、スポーツを題材にしてつくり出すのに成功してきた。この伝統は20世紀前半に始まったが、今でも脈動し続けている。この数年間だけでも、アメリカン・フットボール、バスケットボール、野球、アイスホッケーから、ボクシング、競馬、サーフィンに至るまで、ハリウッドはほとんどすべてのメジャーなスポーツを映画に取り上げて、高い人気と評価を得ている。1970年代半ば以降、アカデミー賞を獲得した米国のスポーツ映画は全部で4作品ある。直近ではクリント・イーストウッドの女性ボクサーの話「ミリオンダラー・ベイビ

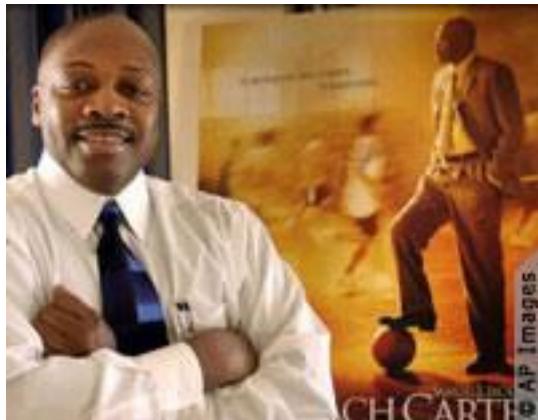
ー」（2004）が、作品賞など4部門でオスカーを勝ち取った（最優秀作品賞を受賞したスポーツ映画は、ほかには2本しかない）。米国のスポーツ映画は、共通の手段を使って米国人の人生の豊かさや人間心理のあやを探求するが、米国人の重視する価値観についてはさまざまなことを教えてくれる。

アメリカン・フットボールは、昔から米国スポーツ映画の重要なサブ・ジャンルであり、近ごろでは、野球を追い越して、最もよく映画の題材になるスポーツとなった。ここ数年間でも、質の高い本格的フットボール映画がたくさん公開されている。そこで追求されているテーマも、不幸を乗り超える（「マーシャルの奇跡」）2006年）、夢の実現に向けて奮闘する（「インヴィンシブル 栄光へのタッチダウン」2006年）、貪欲に優秀さを求める（「プライド 栄光への絆」2004年）、人種的・階層的分裂を癒し、共同体を築く（「タイタンズを忘れないで」2000年）、運動選手の生来の競争心と純粋さがプロスポーツ産業界の愚かな商業主義やシニシズムに打ち勝つ（「エニー・ギブン・サンデー」1999年）といったように、実にさまざまである。こうしたテーマの多様性もさることながら、これら最近の映画から浮かび上がってくるのは、フットボールに関するメッセージだ。つまり、壮大なスケールや度外れな華々しさ、肝の座った根性、そしてもちろん積極果敢な攻めの姿勢という点で、アメリカン・フットボールは米国人の生活そのものを最も完璧かつ鮮やかに象徴するスポーツだというメッセージである。

最近比較的少なくなってきたのがバスケットボールと野球の映画で、これらのスポーツは、観客動員力では2位と3位を占める。ここ数年間につくられたバスケットボール映画の2大ヒット作は、どちらも実話に基づき、人種的融合（「グローリー・ロード」2006年）や、チームワークと自尊心（「コーチ・カーター」2005年）というテーマを扱っている。米国バスケットボール映画のもうひとつの名作「フープ・ドリームズ」（1994年）は、スポーツ映画の分野では数少ないドキュメンタリー作品で、米国の大都市貧困層の生活と、夢の力（と現実の世界における限界）を鮮やかに描き出した。最近の2作品もそれぞれ、これと同じポイントを突いている。すなわち、肌の色や社会経済的出世の階段がどのようなものであろうと、より大きなチームとより高い目標に全力をささげれば偉業を成し遂げられるということだ。「フープ・ドリームズ」は、それにしてもそれは簡単にできることではないと忠告している。一方、この数年間につくられた米国野球映画の大作「オールド・ルーキー」（2002年）は、やはり実話にヒントを得たものだが、どんなに可能性が低くても夢を追いかけるのに年を取りすぎているということはないのだと、いかにも米国的なやり方でわれわれに気づかせる。

ハリウッドが昔からボクシングに魅了されていることはすでに実証済みだ。最近のボクシング映画の3大作品といえば「ロッキー・ザ・ファイナル」（2006）、「シンデレラマン」（2005）、「ミリオンダラー・ベイビー」（2004）だが、すべて勝ち目のない挑戦の話、伝統的なアンダードッグ・ストーリーだ（もっとも「ミリオンダラー・ベイビー」はもっと複雑なほかのテーマも追求している）。米国のスポーツ映画製作者たちにとって永遠のお気に入りである勝ち目のない挑戦者の話は、オリンピックのアイスホッケー・チーム（「ミラクル」2004年）や競馬場の馬（「サービスケット」2003年）にまで及ぶ。これらの映画に登場する運動選手（「サービスケット」では競走馬）は、圧倒的に不利な状況にもかわらず驚くべき勝利を収めるのである。

全体として、これらの映画は米国人の価値観を雄弁に語っているが、外国の観客の感情にも訴える。それは、これらの作品が根本的にはスポーツ映画というより、マウンドに立ち、全力投球し、夢を生きるというわれわれのあこがれについて描いている映画だからである。



実話に基づいた映画「コーチ・カーター」（2005年）のポスターの前でポーズをとる高校のバスケットボール・チーム監督ケン・カーター。映画の中ではサミュエル・L・ジャクソンがカーターを演じている。

©AP Images/Tony Gutierrez

スポーツと米国社会の関係についての詳しい情報は、2003年のEジャーナルUSA「米国のスポーツ」を参照。

米国の外国映画ラッシュ

ティモシー・コリガン

今年(2007)、米国では、高い水準の傑出した外国映画にかなりの注目が集まつたが、外国映画をめぐる状況は、ずっと以前から進展していた。筆者はこの現象のルーツをたどり、「米国で多く上映されるようになった独特なアクセントで話される映画」の背景を探る。ティモシー・コリガンはペンシルベニア大学(フィラデルフィア)の英語教授で、映画研究科科長でもある。著書数冊。最近出版された「*The Film Experience*」(2004)は、パトリシア・ホワイトとの共著。



ギジェルモ・デル・トロの「パンズ・ラビリンス」は、2007年のアカデミー賞候補となった外国映画で、3部門でオスカーを受賞した。

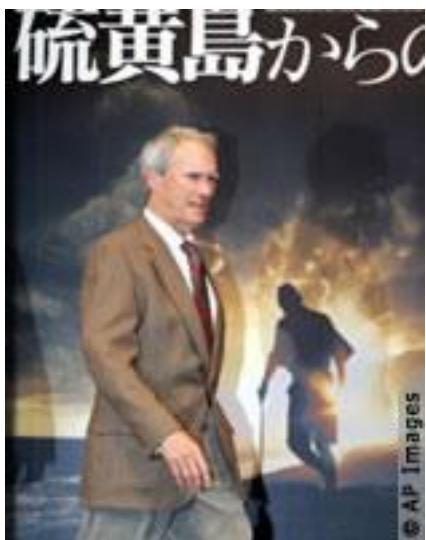
© AP Images/Mark Avery

2007年2月に開かれた第79回アカデミー賞の最も興味深い特色は、3本のメキシコ映画(アレハンドロ・ゴンザレス・イニヤリトウの「バベル」、アルフォンソ・キュアロンの「トゥモロー・ワールド」、ギジェルモ・デル・トロの「パンズ・ラビリンス」)が候補に挙がったことかもしれない。これら3作品のうち外国語映画部門の候補は最後の1本だけ。残り2本のほかにも本流部門で候補に挙がった外国映画が数本ある。例えば英国映画「クイーン」のヘレン・ミレンと、スペイン映画「ボルベール<帰郷>」のペ内ロペ・クルスは主演女優賞にノミネートされた。こうした事実が物語っているのは、ハリウッドが栄誉を与えようとする対象が、明らかにグローバル化してきたということだ。また、作品賞と監督賞にノミネートされた、米国の象徴ともいるべきクリント・イーストウッドの「硫黄島からの手紙」が、何よりもまず日本語の作品だということも、ハリウッドの2007年アカデミー賞授賞式に外国勢が流入してきたことをうかがわせる。

確かに、現代の世界は少しずつ縮小しており、いろいろな意味でいつかどこかで見たようなものばかりになってきたが、それでも、例えば「らくだの涙」(2003)のモンゴルの風景のような、異国の人々や場所の魅力は、知らない土地や民族に対する観客の昔ながら的好奇心を誘い出す。しかし、米国で多く上映されるようになった「独特なアクセントで話される映画」の背景には、もっと別の現実的な力が働いている。

国際市場の誕生

今年米国で公開された外国映画のラインアップが、どんなに特徴的で目立っていたとしても、米国と外国映画文化との複雑な関係は、今に始まったものではない。1895年にフランスで初めて映画が公共の場で上映されて以来、映画史の主たる原動力となってきたのは、米国の映画文化と海外の製作会社、それに劇場上映市場の相互の対決と交渉だった。1908年、トマス・エジソン（映画のカメラを発明した米国人）の指揮の下でモーション・ピクチャー・パテンツ・カンパニーが設立されたが、その狙いは明らかに米国内での外国映画の配給を制限することにあった。その後、第1次世界大戦の影響が残る中で、米国映画産業が次第に世界を支配するようになり、グローバル化したハリウッドは、低迷するドイツ経済に手を伸ばして1926年パルファメト協定を結んだ。米国の映画会社のパラマウント映画とメトロ・ゴールドワイン・メイヤー（MGM）、およびドイツの映画会社ウーファーは、ハリウッドのドイツ上映市場参入を認めるだけではなく、才能あるドイツ人の米国移住の門戸を開くことで合意した（その中には、「カサブランカ」のマイケル・カーティス監督や、スウェーデンのスター女優グレタ・ガルボが含まれていた）。



クリント・イーストウッドの「硫黄島からの手紙」は、日本語の映画にもかかわらず、外国語映画として分類されなかつた。© AP Images/Katsumi Kasahara

第2次世界大戦後、米国の文化的拡大が進むと、1948年にパラマウント判決（米国で映画製作配給と劇場を分離するよう命じた判決）が下され、これにより緩やかながら米国映画文化の方向性を大きく変える基礎が築かれ、今日のような国際的映画事情へつながっていった。この判決は実質的に、ハリウッドの大手映画会社に独占支配されていた米国市場を開放するものだった。その結果、1950年代から1960年代初頭にかけて、米国の独立系映画はもちろん、最終的には外国映画も米国の映画館に進出し始めた。スウェーデンの英格マル・ベルイマンやフランスのフランソワ・トリュフォー、イタリアのミケランジェロ・アントニオーニ、その他多数の映画人に率いられた外国映画の新しい波は、とりわけ、異なる文化に关心を持つ若者や研究者など新しく台頭してきた観客層に受け入れられたが、その後の数十年間で、増加しつつあった一般の観客にも关心が広がった。

戦後、ハリウッドは世界的に市場を拡大し、それに続いて外国映画も米国の各地で上映されるようになって人気が高まった。現在では、こうした戦後の一般的傾向の背景にはそれなりの経済的・技術的な根拠と形態があったと考えられている。一番重要なのは、最近爆発的に増えた国際映画祭が、きわめて注目度の高い舞台として、国際市場（とりわけ高い利益を上げる米国劇場・DVD業界系列）に外国映画を紹介し、支援してきたことだろう。

国際映画祭の第1号は、1932年の開始以来今でも影響力のあるベネチア映画祭だが、現在ではカンヌからベルリン、トロント、テルライド（米国コロラド州）に至るまで、世界中の都市で400から1000もの映画祭のイベントが次々と開催され、イタリアの「ライフ・イズ・ビューティフル」(1998)やドイツの「ラン・ローラ・ラン」(1998)などの作品が、これらの映画祭での受賞を契機に世界市場へと送り出されている。初代のベネチア国際映画祭は映画を通じて内外の文化の促進を目指したが、それと同じように今日の映画祭も、しばしば自分の国の映画やハリウッド映画の領域外にある文化について、深い知識をもたらす案内役を果たしている。また、映画祭が世界中の批評家の注目度を測るバロメーターになると同時に、比較的小規模で独創的な映画のための資金や配給元を引き寄せるケースも多い。

その好例が最近のイランと韓国の映画である。アッバス・キアロスタミの「桜桃の味」は、イラン国内では支持も人気もほとんどないまま1997年カンヌ映画祭の最高賞パルム・ドールに輝き、ヨーロッパや米国で数多くの現代イラン映画が上映される先駆けとなった。大成功を収めた「過激なアジアン・シネマ」の代表作、パク・チャヌクの「オールド・ボーイ」(2003)は、香港、カンヌ、ストックホルムの国際映画祭で数々の賞を獲得した後、米国のアートシアター系列で上映されることになったばかりか、パクは「ニューヨークタイムズ・マガジン」(ニューヨークタイムズ紙日曜版の別冊)にも登場した。ホウ・シャオシェンの作品(1993年の「戯夢人生」や1998年の「フラワーズ・オブ・シャンハイ」など)は映画祭で認められたおかげで財政的援助が得られ、その結果米国で上映されることになった。また、ウォルター・サレスのブラジル映画「セントラル・ステーション」(1998)は、サンダンス映画祭での受賞によって突然米国における前途が開けた。

観客の開発

最近、外国映画が米国に流入している2番目に重要な要素は、これらの新しい上映機会と口コミによるプロモーションに関係がある。つまり、1990年以来いわゆるニュー・インディペンドント・シネマの人気と収益性が上昇しており、海外からの作品がある程度こうした動きに便乗できることだ。クエンティン・タランティーノやジム・ジャームッシュは、例えばミラマックスのような配給（後には製作も手がける）会社に助けられながら、使い古され飽きられた多くのハリウッド的手法とは異なるストーリーやスタイルを観客に提供した。1990年代に風変わりで特徴的な新しい作品に対する嗜好が高まると、これらの配給・製作会社は、特に観客のターゲットを絞って、外国映画を（たいていは映画祭で）発掘・輸入し、時にはリメークするようになった。「クライシング・ゲーム」(1992)や「イル・ポスティーノ」(1994)などの作品は、米国市場で外国映画興行成績の新記録を打ち立てた。英国映画「クライシング・ゲーム」は

アイルランド共和国（I R A）のテロリストを描いた秀作だが、米国ではセックスと秘密を盛り込んだミニ・ヒット作へと変貌し、宣伝キャンペーンのお手本となった。

当然のことながら、米国の大手映画会社はミラマックスのような会社の成功にならって、独自に独立系映画や外国映画を発掘・配給するための「特殊専門部門」を創設（あるいは再設立）した。例えば、そうした部門のひとつであるソニー・ピクチャーズ・クラシックスは、チャン・イーモウのロマンスがらみの武侠映画「LOVERS」（2004）、スペインのペドロ・アルモドバルの風変わりなサスペンス映画「ボルベール＜帰郷＞」（2006）、ミヒヤエル・ハネケのフランス・オーストリア・ドイツ共同製作のスリラー映画「隠された記憶」（2005）を配給している。また、フォックス・サーチライト・ピクチャーズ（親会社は20世紀フォックス）は、「ベッカムに恋して」（2002）や「あるスキャンダルの覚え書き」（2006）など、大当たりした英國映画を輸入・配給している。

こうしたトレンドの生みの親であると同時にその所産でもある現代映画は、さまざまな国の共同製作で作られるケースが増えており、投資のたびに世界的にも米国内においても配給規模を拡大する可能性を秘めている。昔から行われてきた共同製作は、しばしば米国の会社に外国映画の製作に一から関与できる機会を与え、多くの場合、米国内での英語吹き替え版の公開が保証される。1926年のパルファメト協定のように、共同製作と資金提供は、監督、プロデューサー、専門技術者、またロベルト・ベニーニ、アン・リー、ギジェルモ・デル・トロ、ルトガーハウアー、ペネロペ・クルス、ミヒヤエル・バルハウスといった優れた人材の共同参加を促している。そして、人材の交流に伴って、ジャンルやプロットはますます渾然一体となるが、出来上がった映画が、完全に米国的ではないにしても少なくとも米国的嗜好を取り入れた「インターナショナル」な作品であることは、見ればすぐにわかる。リュック・ベッソンのスピーディーなアクション犯罪スリラー「ニキータ」（1990）はその一例である。

断っておくが、海外から入ってくる最近の映画が、単に米国的ジャンルに適応しただけと言っているわけではない。それどころか、少なくともそれと同じように重要なのは、ありきたりなハリウッド的手法以外の新しいストーリーや登場人物を、外国映画が米国の観客に提供したことだ。アカデミー賞を受賞した「クラッシュ」（2005）とそれに対する批評家の好意的反応は、はるかに衝撃的だったイニヤリトゥの「アモーレス・ペロス」（2000）の先例なくしては考えられない。

デジタル配給

米国映画を際立たせる決定的で特に現代的な要素は、映画の製作・配給のデジタル化である。現在および近い将来のデジタル革命に伴って、1970年代から80年代にかけてはビデオの流通によって提供されていた自由で開放的な機会が、今や現代的なDVDやインターネット配信の新しいチャンスに切り換えられようとしている。ビデオとDVDの売り上げが劇場のチケット売り上げを超えたのははるか以前のことになるが、こうした変化の中で見落とされがちのは、ビデオ・DVD市場によって、外国映画の配給がターゲットを絞りやすくオープンな市場を手に入れたことである。ほとんどの外国映画がごく限られたアートシアター系列を除いてまれにしか劇場公開されないとしても、DVD技術の発展を通じた家庭用のビデオ・DVDが普及すれば誰でもたくさんの外国映画を見られるようになる。さらに、おそらくそれより重要なのは、

例えばアジア映画、ヨーロッパ映画、アフリカ映画など、特定の映画に関心のある地域に、配給会社がDVDのターゲットを絞ることが可能になるという点かもしれない。

「ボリウッド」（ボンベイを拠点としたインド映画産業）で製作されるインド映画は、特に顕著な例である。ジェーン・オースティンの小説「高慢と偏見」のインド版リメイク「Bride and Prejudice」は、2004年には米国全土で、オルタナティブ・シネマとして見られるようになり、「モンスター・ウェディング」(2001)を含むミラ・ナイールの最近の映画は、この15年間に、米国では批評面・経済面ともに知名度を上げてきた。しかし、独特のアクセントでしゃべる人々が米国で映画の話に花を咲かせるためには、インド映画にしろほかの外国映画にしろ無限の多様性を秘めた映画を、近所のレンタル店やオンラインDVDレンタルを通じて、多少なりとも自由かつ継続的に見られる機会がなければならない。ネットフリックス（米国のオンラインDVDレンタル会社）のような会員制サービスなどで、以前より簡単に世界中の映画を幅広く選べるようになったが、この傾向は、インターネットからの映画のダウンロードが避けられなくなったため、近い将来さらに加速するだろう。そんな状況にある現在、映画を、エスペラントのような世界共通語とは言わないまでも、われわれの家庭やコミュニティで交わされる多言語の会話としても一度見直したいという、フランスで初めて映画が公開上映された1895年当時のようなロマンチックでユートピア的な思いを抑えきれない。

この記事で述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を反映するものではありません。

米国の映画祭

キャロリー・ウォーカー

米国全土で映画祭に対する人々の関心と支持が高まり、新人の映画製作者には広い発表の場を、観客にはさまざまな映画を楽しむ機会を与えていた。キャロリー・ウォーカーは米国務省国際情報プログラム局の専属ライター。

米国だけで300以上ある映画祭は、映画ファンにとっては、そのような場がなければ上映されずに終わるかもしれない短編・長編映画を見る機会となっている。それはまた、独立系映画の製作者たち、とりわけ新たに訓練された若いアーティストたちに、先端的な作品や観客の心を強く動かすドキュメンタリーを披露するまたとない機会を提供し、さらにはそれが映画界でキャリアを築く上でプラスに働くかもしれない。

映画祭には2つの重要な目的がある。ひとつは、映画会社に採用されて商業映画を製作するまでにはもう少し発表の機会が必要な、独立系映画製作者たちに光を当てること。もうひとつは、映画ファンと地元の人々がいろいろな考えについて話し合う手段となることである。フランスのカンヌ国際映画祭やユタ州のサンダンス映画祭などよく知られている映画祭から、ペンシルバニア州ピッツバーグの「シルク・スクリーン」（アジア系米国映画祭）やオレゴン州ポートランドの「カスケード・フェスティバル・オブ・アフリカン・フィルムズ」など、あまり知られていない催しまで、さまざまな規模や形態の映画祭がある。何十年も実施されている映画祭もあれば、「フィールドからのストーリー」（3年目を迎えた国連ドキュメンタリー映画祭）のように比較的新しいものもある。国連がスポンサーのこのドキュメンタリー映画祭では、感動を与える映画の製作というだけでなく、同時に、世界が抱える問題の克服もテーマとなっている。（「フィールドからのストーリー」の詳細は、

[<http://www.mcainy.org/common/11040/?clientID=11040>] を参照。）

ほとんどの映画祭では、審査員と観客の両方で賞を決めるコンビネーション方式を採用して、作品や製作者にスポットライトを当てているが、コンペティションにエントリーしない作品も上映される。一般的にはこのような方法で、映画は配給市場に出され、独立系の監督や無名に近い俳優たちは知名度を上げていく。毎年アカデミー賞を授与している映画芸術科学アカデミーは、米国内および国外の60の映画祭で最高賞を受賞した作品の中から最も優れた実写短編映画とドキュメンタリーにオスカーを贈っている。

毎年恒例のイベントとなった映画祭が増え、成功している映画祭主催者の多くは、熱烈な映画ファンの中から有料会員を集めることができるようにになった。これらのファンは、映画祭で上映が企画される映画は何でも見ようと会員登録する。会費は1年ごとの前払い制なので、特に米国人にとってこれは映画祭に絶大な信頼を置いているということになる。多くの場合、会費を払っても、チケットの先行購入ぐらいしか特典はない。米国人が映画祭の会員になる動機のひとつは、映画祭が米国で外国映画を見るための拠点となることが多いからだ。上映会に出席する監督や俳優は、ワークショップに参加して雰囲気を盛り上げ、地域や主催者が切実に必要としている支援を増やすのに一役買うことが多い。映画祭に対する地域ぐるみのかかわりや関心が高まっているため、地元企業や大企業の格好な後援イベントとしても人気を集めている。

映画芸術科学アカデミーが作成した映画祭一覧リストは下記のサイトへ。
http://www.oscars.org/80academyawards/rules/rules_shortfest.html

興行関連のデータ

米国映画協会(MPAA)は、見やすい図表やグラフを駆使して興行成績データを24ページのレポートにまとめた。このレポート「2006年米国興行市場統計データ(2006 U.S. Theatrical Market Statistics)」の全文を参照するには、下記のサイトへ。

<http://www.mpaa.org/2006-US-Theatrical-Market-Statistics-Report.pdf>
レポートの要点は次のとおり。

- 米国映画産業の2001年の興行収入は169億6000万ドル。うち約半分の84億1000万ドルが国内、残りは国外における収入。
- 米国映画産業の2006年の興行収入は258億2000万ドル。うち3分の1強の94億9000万ドルが国内、残りは国外における収入。切符の売り上げは、2005年に比べて国内および国外共に伸びたが、伸び率は国外の方が高かった。
- 2006年に初めて1本の映画の国内興行収入が4億ドルを突破(「パイレーツ・オブ・カリビアン/デッドマンズ・チェスト」)。1本で5000万ドル～9900万ドルを稼ぐ映画が増えており、その数は2005年の36本から2006年の45本へと増加した。全体的には、5000万ドル以上を稼ぎ出した映画は2005年の56本から2006年の63本へと増加した。
- 米国で封切られた新作映画。

1996年	420本
2002年	449本
2005年	535本
2006年	599本

- 映画が好きな人は、映画に代わる娯楽機器(DVDプレイヤー、衛星テレビ、その他)が自宅にあっても映画館に通い続ける。映画館へ足を運ぶ回数は、娯楽機器を4つ以上所有しているか利用できる人で年間約10回、3つ以下だと年間7回にすぎなかった。
- 米国内の映画館入場者数は、2006年に史上最多を記録。切符の売り上げ数は、ほぼ15億枚に上った。

* MPAAは大手映画会社6社が設立した非営利団体で、映画産業のために活動している。そのウェブサイト[<http://www.mpaa.org/>]では、MPAAについて「米国の映画・ホームビデオ・テレビ業界を代弁し、擁護する団体」として説明している。

若い映画制作者のフォト・ギャラリー

ミランダ・ジュライ



©AP Images/Francois Mori

ミランダ・ジュライは1974年生まれ。本人の公式サイト [mirandajuly.com/about]によると、〈ミランダ・ジュライ [ジュライは本名ではない] は映画製作者、パフォーミング・アーティスト、作家。カリフォルニア州バークレーに育ち、この地で初めての脚本を書き、みずから演出して地元のパンク [ロック] クラブで上演して、キャリアの第一歩を踏み出した。ジュライのビデオ、パフォーマンス、インターネットを使ったプロジェクトは、近代美術館 (MOMA) やグッゲンハイム美術館、そして2002年のホイットニー美術館ビエンナーレで紹介された [3館ともニューヨークにある]。パリス・レビュー誌やハーパーズ・マガジン、ニューヨーカーに短編小説を発表し、2007年5月にはスクリブナー社から短編集が出版される。ジュライはアーティストのハレル・フレッチャーと一般参加型ウェブサイト learningtoloveyoumore を作り、2007年秋にはプレステルよりコンパニオン・ブック (手引書) が発売される予定。脚本・監督・主演を手がけた初の長編映画「君とボクの虹色の世界 (Me and You and Everyone We know)」はサンダンス映画祭で審査員特別賞、カンヌ映画祭でカメラドール (新人監督賞) を含む4つの賞を受賞。最近、新しいパフォーマンスを初演。現在は2作目の映画に取りかかっている。ロサンゼルス在住〉

イサベル・コイシェ



©AP Images/Daniel Ochoa de Olza

1960年スペイン生まれの監督・脚本家・プロデューサーで、時には女優として出演することもある。大学で歴史を勉強した後、広告業界に就職。結局、映画製作への愛着と広告の製作面での経験が結びつき、映画製作会社を設立。スペイン、カナダ、フランス、米国の会社とともに数ヵ国語で映画をつくった。最初の英語の映画は1996年の「あなたに言えなかったこと」で、出演者は米国人。コイシェはスペインのゴヤ賞に2回ノミネートされており、彼女の作品はサンダンス映画祭を含む多数の映画祭で上映されている。

アニー・サンドバーグ



©AP Images/Michel Spingler

テレビのリアリティ一番組、ドキュメンタリー、短編映画、ドラマ、独立系映画などの分野で活動する脚本家・監督・プロデューサー・シネマトグラファーのサンドバーグは、何本もの

受賞作品を製作してきた。無実の罪で長い間投獄されたアフリカ系米国人の男の実話に基づく2006年の「The Trials of Daryl Hunt」はインディペンデント・スピリット賞とサンダンス審査員大賞にノミネートされた。2007年の「The Devils Came on Horseback」はダルフールの殺戮をテーマにしたドキュメンタリーだ。

エンターテインメント業界とメディアで働くダートマス大学卒業生を紹介するウェブサイト(alum.dartmouthentertainment.org/newsanddocs.html)には、サンドバークの経歴が次のように紹介されている。(以下同サイトからの引用)

〈アマチュアボクシングの世界とサウスプロンクスでトレーニングを積む若者たちの生活を描いた長編ドキュメンタリー「In My Corner」を共同製作。この作品は、PBS(公共放送サービス)の〔エミー賞〕受賞番組「P.O.V(ポイント・オブ・ビュー)」シリーズの1本として全米に初公開された(1999年)。手がけたテレビ番組には、A&E局(アーツ・アンド・エンターテインメント・ネットワーク)の葬儀屋一家を主人公にしたドキュメンタリーシリーズ「Family Plots」などがある。またプロデューサー兼ディレクターとして、ニューヨーク・タイムズ・テレビジョンのシリーズ「Now Who's Boss」の立ち上げに協力。プロデューサーとして、1996年にアカデミー賞とエミー賞を受賞したHBO(ホームボックス・オフィス)と米国ホロコースト記念ミュージアムが共同製作した「One Survivor Remembers」や、10回からなるPBSの「History of American Cinema Project」(1995)にかかわった。ミラマックス社の脚本下読み係として映画界で働きだして以来、フリーランスの脚本家・プロデューサーとして幅広く活動。全米アウトドア指導者養成学校のケニアにおける学期を終了後、世界食糧計画プロジェクトに参加してナイロビで英語を教えた。ダートマス大学の卒業生で、同校では英文学の学士号を取得した〉

サラ・ポーリー



©AP Images/Markus Schreiber

カナダ出身。子役として映画やテレビのキャリアをスタート。その後、主に独立系作品で悲劇の渦中にあるヒロインなどを演じるようになる。イサベル・コイシェ監督の「あなたに言えなかつたこと」「あなたになら言える秘密のこと」に出演。最近ではカナダのテレビ番組を中心ディレクター・監督業にも進出している。29歳（1979年1月8日生まれ）のポーリーは政治活動にも熱心であることで知られ、演じた役と同じくらいの数の役を蹴ったといわれる。トロントに住むポーリーは、カナダや米国各地の映画祭の演技部門でノミネートされている。

米国で2007年5月に公開された監督作品「アウェイ・フロム・ハー君を想う」は、アルツハイマー病のパートナーをもつ2組のカップルのラブストーリーを纖細に描いたとして高く評価される。ポーリーの前途有望なキャリアに新たな業績が加えられた。

アルフォンソ・キュアロン



©AP Images/Diane Bondareff

1961年、メキシコ生まれ。メキシコで映画を勉強し、同国で撮影された英語による映画の製作にかかわるようになる。児童文学のクラシック「リトル・プリンセス」、チャールズ・ディケンズの「大いなる遺産」、J・K・ローリングの「ハリー・ポッターとアズカバンの囚人」など、長年にわたって文学を原作にした作品を手がけている。2007年には、製作を務めた「パンズ・ラビリンス」、共同脚本・監督の「トゥモロー・ワールド」（これも小説の映画化）の2本が広く称賛された。「パンズ・ラビリンス」はアカデミー賞やBAFTA（英国映画テレビ芸術アカデミー）賞の数部門など、さまざまな映画賞の候補となり、多くの賞に輝いた。「トゥモロー・ワールド」もキュアロンに脚本賞や監督賞をもたらしている。「パンズ・ラビリンス」は本人が設立した製作会社エスペラント・フィルムズの作品だ。キュアロンはしばしば、友人で同郷の監督たち、ギジェルモ・デル・トロとアレハンドロ・ゴンザレス・イニヤリトウとともに、現代の世界の映画にメキシコ人が貢献していることを世界の観客に知らしめたとしてたたえられている。現段階ではまだ映画会社の確認は取れないものの、キュアロンがハリー・ポッターの世界に戻ってきて、シリーズ最終話を監督するといううわさもある〔最終巻は他の監督に決まった。〕。伝えられるところでは、キュアロンは、最初に手がけたハリー・

ポッター映画で至福の2年間を過ごしたので、もう一度そんな体験ができたうれしいと述べたといわれる。「ハリー・ポッター」シリーズ最終巻「Harry Potter and the Deathly Hallows」（邦題「ハリー・ポッターと死の秘宝」）は今年 [=2007年。邦訳は2008年] 出版された。

ノア・ボームバック



©AP Images/Jim Cooper

1969年生まれ。脚本や監督を務めるほか、多くの作品に俳優として出演している。監督デビュー作は、大学をいやいやながら卒業する学生たちを描いた「Kicking and Screaming」。1996年のニューヨーク映画祭でプレミア上映され、初めてメガホンを取った作品でありながら多くの賛辞が寄せられた。90年代後半に数本の映画を撮ったが、2005年の「イカとクジラ」までは映画製作よりも脚本家としての活動が目立った。

ローラ・リニーとジェフ・ダニエルズが主演する「イカとクジラ」は自伝的な作品で、インディペンデント・スピリット賞やアカデミー賞にノミネートされた。2007年公開の「マーゴット・ウェディング」にはニコール・キッドマン、ジェニファー・ジェイソン・リー、ジャック・ブラック、ジョン・タトゥーロが出演。ウェス・アンダーソン監督との2本目の共作であるストップモーション・アニメ映画「The Fantastic Mr. Fox」を製作準備中。前作は2004年に公開されたビル・マレイとオーウェン・ウィルソン主演の「ライフ・アクアティック」。作家と評論家の両親をもつボームバックはニューヨークで育った。

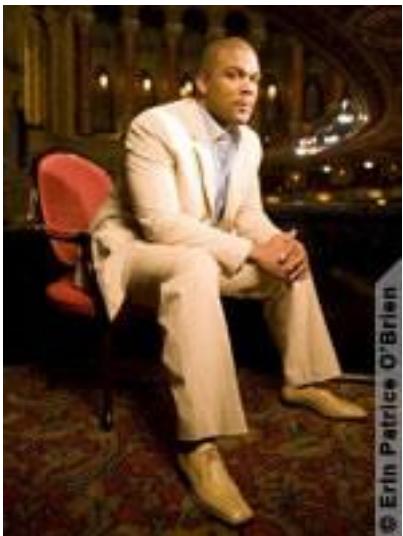
ガブリエレ・ムッチーノ



©AP Images/Matt Sayles

1967年生まれ。ローマの映画学校で学び、母国イタリアで映画製作者として成功する。ムッチーノの作品「L'ultimo bacio」は2002年のサンダンス映画祭で受賞（2006年に「ラストキス」としてリメークされる）。おそらくはこの受賞がひとつのきっかけとなって米国人に才能を注目されたムッチーノは、映画製作の新たな段階へ入った。主演のウィル・スミスがオスカー候補になった2006年の「幸せのちから」など、英語による映画製作でも評判をとった。現在はテレビ番組のシリーズを手がけている。また映画では、米国への移民の愛の物語を描くという「Man and Wife」と、ジム・キャリーとキャメロン・ディアスの出演が予定されている「A Little Game」を製作準備中。（「A Little Game」はキャリーもディアスも降板、監督もアン・リーになった。）

タイラー・ペリー



©Erin Patrice O'Brien

1969年ルイジアナ州ニューオーリンズ生まれ。子供時代に貧困や虐待、耐えがたいほどの困難を経験する。1990年、テレビの「オプラ・ウィンフリー・ショー」を見たとき、ワインフリーが視聴者に向かって辛い経験はそれを書くことによって乗り越えろとアドバイスするのを聞く。ペリーのその試みは結局、最初の戯曲になった。賞に輝く脚本家、作家、俳優、プロデューサー、監督であるペリーは、ジレンマをかかえたアフリカ系米国人の日常生活をテーマにした舞台や映画で知られている。彼の舞台を初めて映画化した作品で3役を演じ、その後映画にも続けて出演している。

ペリーの作品は、都市で上演されていたアフリカ系米国人による演劇の伝統にのっとった教訓劇の特徴を持つ。主役はたいてい、知恵と良心を駆使してユーモラスに他のキャラクターたちを引っ張っていく傑出したヒロインだ。ペリーは自分の母親と叔母から影響を受けてこの女性主人公を生み出し、「マディア」という愛称を与えた。彼はヒロインのコミュニティーの文化とアフリカ系米国人を中心とした視聴者の文化に絶妙に波長を合わせて、ユーモアをもってマディア役を演じている。

マディアはペリーが書いた最初の本「Don't Make a Black Woman Take Off Her Earrings: Madea's Uninhibited Commentaries on Love and Life」の主人公でもある。2006年に出版された同書は数週間にわたってニューヨーク・タイムズ紙のノンフィクション部門のベストセラーリスト1位になり、同年の権威あるクイル賞のユーモアブック部門と年間最優秀書籍部門に選ばれた。ペリーはつねに製作段階の芝居、公開中の映画、放送中のテレビ番組を抱えている。ペリーの公式サイト [www.tylerperry.com] によると、2つのテレビシリーズ「House of Payne」と「Meet the Browns」が進行中で、2007年と2008年にケーブルテレビ局で放送開始の予定。映画は2007年2月に「Daddy's Little Girls」が公開された。

ウィル・スミス



©AP Images/Franka Bruns

ペンシルベニア州フィラデルフィアで過ごした少年時代、ウィル・スミスは友達を引きつける魅力があったため「ザ・プリンス」というニックネームをつけられた。公式サイト [<http://www.willsmith.net>] によると、ラップを始めたのは12歳からという。16歳までに「ザ・フレッシュ・プリンス」という名前でラップ歌手として有名になり、友人の「ジャジー・ジェフ」とよく舞台に上がるようになった。

同時に、俳優としても注目を集めはじめた。22歳のときにカリフォルニアに移住し、テレビのコメディドラマ「The Fresh Prince of Belair」（ベルエアはカリフォルニア州ロサンゼルス近郊の裕福な地区）に主演。6年後のシリーズ終了時にはすでに映画界にも進出を果たしていた。現在、スミスはハリウッド屈指の成功した俳優であり、ボクサーのモハメド・アリの人生を追った「ALIアリ」、「メン・イン・ブラック」「ヒッチ」「バッド・ボーイズ」、2006年の「幸せのちから」などドラマからコメディまで幅広い作品で実力を発揮している。「幸せのちから」ではアカデミー賞候補となり、NACCP（全米黒人地位向上委員会）のイメージ賞をはじめ数々の賞に輝いた。またこの映画の成功がとりわけ喜ばしいものだったのは、スミスがビジネスパートナーとともに設立した映画・テレビ番組製作会社オーバーブルック・エンターテインメントの製作した作品だったからだ。同社は何本ものヒット作を世に送り出している。「幸せのちから」では当時8歳（1998年7月8日生まれ）の息子ジェイデン（写真右）と共に演じている。

2007年4月、ニュースウィーク誌は、俳優、ミュージシャン、プロデューサー、夫、父親をこなす38歳（1968年9月25日生まれ）のウィル・スミスを、これまで世界で44億ドルの興行収入を稼ぎだしたとされる実績などをあげて、「世界で最もパワフルな俳優」と称えた。この記事のためにニュースウィークのインタビューを受けたある映画会社のトップは、スミスの人気を、「……まず神のようなウィル・スミスがいて、それから人間たちがいるようなもの」と表現したという。

ルーシー・リュー



©AP Images/John Smock

台湾移民の両親のもとにニューヨークで生まれる。5歳になるまで英語を習わなかった。高校卒業後にミシガン大学でアジアの言語と文化の学位を取得。大学生活の終わりごろに舞台「不思議の国のアリス」の役を手に入れ、俳優としてのキャリアをスタートさせた。現在38歳（1968年12月2日生まれ）になるリューのこれまでの活動は多彩で、数本のアニメーションの声の吹き替えやテレビドラマ「アリー my ラブ」のレギュラーを務め、「キル・ビル」「チャーリーズ・エンジェルズ」とそれらの続編などの映画に出演した。ドキュメンタリーを含む映画の製作も始め、自らプロデュースした作品のうちの1本「ルーシー・リューの『3本の針』」ではエイズウイルスに感染した中国の女性を演じている。

多才なリューはアーティストとして個展を3回開催。マーシャルアーツに通じ、楽器を演奏し（アコーディオン）、スキーやロッククライミングもこなす。中国語は堪能で、日本語、イタリア語、スペイン語も少し話す。ユニセフの米国基金大使としてパキスタンやレソトを訪問。メディアに注目されたアジア系米国人としてアジア人優秀賞を受賞している。

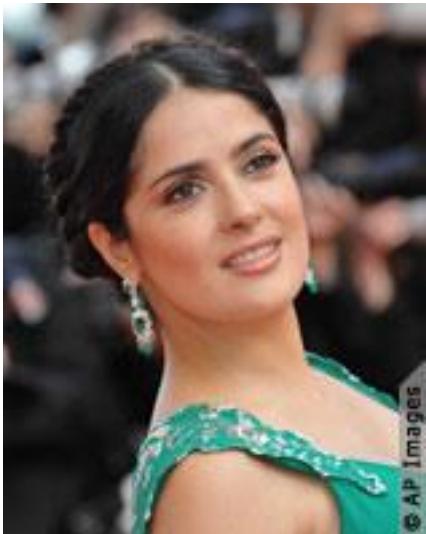
ソフィア・コッポラ



©AP Images/Dima Gavrysh

有名な映画製作者フランシス・フォード・コッポラを父親に1971年に生まれる。タイミングよく父親の「ゴッドファーザー」で洗礼を受ける赤ん坊役でスクリーンデビュー。1990年の「ゴッドファーザーPARTIII」ではメアリー・コレオーネを演じた。コッポラは子役からスタートし（ドミノ・コッポラという名前で出演していることが多い）、少女時代から大人になるまで続けた。しかし90年代には父親と同じようにプロデューサーと監督の道を歩きはじめる。2004年の「ロスト・イン・トランスレーション」はアカデミー賞の最優秀監督賞にノミネートされる。女性監督がこの部門で候補になるのは3人目で、米国人女性としては第一号だ。2006年の「マリー・アントワネット」は、コッポラが愛するコンテンポラリーミュージックを使い、物語を現代風にアレンジしたもの。同作品はカンヌ映画祭の最高賞であるパルム・ドール賞など多くの賞の候補になった。カンヌではフランス全国教育制度映画賞（the Cinema Prize of French National Educational System）を受賞。アカデミー賞では衣装デザイン賞を獲得した。

サルマ・ハエック



©AP Images/Seth Wenig

1966年、メキシコ生まれ。才能、美貌、知性を武器にメキシコや米国など各国で女優、プロデューサー、監督として活動し、華々しい成功を収めている。メキシコでテレビと映画のスターになった後に米国に進出。当時、米国映画で中南米系の女優の役柄がかぎられていることを思い知らされる。レバノン人の血を引くハエックは忍耐力を発揮し、才能を磨き、社会活動に手を染めながら、より大きくて幅広い役を獲得しはじめる。同時に、おそらく自分や他の女優たちのために良い役を確保したいと思い、プロデューサー分野に進む。最初に製作した長編映画「大佐に手紙は来ない」（1999年）はカンヌ映画祭で上映され、メキシコ作品としてアカデミー賞外国語映画賞にエントリーされる。

ハエックは、自分で製作した「フリーダ」で伝説的なメキシコ人画家フリーダ・カーロを演じて高く評価された。この作品はアカデミー賞6部門の候補となった。他の出演作品には「愛さずにはいられない」「In the Time of the Butterflies」「ワイルド・ワイルド・ウエスト」「デスペラード」「フロム・ダスク・ティル・ドーン」「レジェンド・オブ・メキシコ/デスペラード」など。

また、コロンビアのテレビドラマ「ベティ～愛と裏切りの秘書室」を米国向けにリメークして、テレビ界に大きな影響を与えた。ハエックも準レギュラーとして登場する米国版「アグリー・ベディ」はイメージ賞、ゴールデングローブ賞、ピーボディ賞を受賞。マイノリティのキャラクターの認知度を高め、視聴者、とりわけ若い女性たちに、外見の美しさが何よりも重要で価値ある特徴というわけではないことを教えるドラマとして称賛されている。

ミニー・ドライバー



©AP Images/Markus Shreiber

1970年、ロンドン生まれ。子供時代の一時期をバレバドスで過ごす。イギリスで教育を受け、ウェバー・ダグラス演劇芸術学院に学ぶ。キャリアは音楽活動からスタートしたが、その後しばらくは俳優業を優先し、現在は両方をこなす。音楽分野では歌手とソングライターとして活躍している。出演作品は「サークル・オブ・フレンズ」「この胸のときめき」「ポイント・ブランク」「オペラ座の怪人」、アカデミー最優秀助演女優賞候補になった「グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち」など。テレビドラマ「ウィル&グレイス」の準レギュラーを務め、2007年からケーブルテレビ局FXのドラマ「The Riches」に出演している。2007年公開の「ザ・シンプソンズ MOVIE」を含む数本のアニメで声の吹き替えをしている。1998年の「At Sachem Farm」(公開は2001年)でプロデュースを手がけ、同じく製作に加わった2008年の「Ripple Effect」ではフォレスト・ウィテカー、バージニア・マドセンと共演している。

ベン・アフレックとマット・デイモン そして プロジェクト・グリーンライト



©AP Images/Chris Pizzello

プロジェクト・グリーンライトの公式ウェブサイト

[<http://www.projectgreenlight.liveplanet.com>]を見れば、これがハリウッドのシンデレラストーリーだとわかる。子供時代からの友達2人が俳優になろうとあがいている。何年もの苦労の末、彼らは自分たちで脚本を書き（「グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち」）、主演して認められ、有名になり、アカデミー最優秀脚本賞を手にする。これがマット・デイモンとベン・アフレックの真実の物語だ。この成功がきっかけとなって、彼らは「アメリカン・パイ」のプロデューサーであるクリス・ムーア、およびミラマックス・フィルム・アンド・テレビジョンと組んで、脚本家として大きく飛躍するチャンスを求めている者と映画業界の架け橋になるための脚本コンテストや仲間づくりをスタートさせることにした。

第1回プロジェクト・グリーンライト脚本コンテスト（PGL1）は2000年秋に開催され、7000を超えるオリジナル脚本の応募があった。応募作品はまず250に、さらに30に絞られ、最終候補に残って興奮冷めやらぬ10人が自分の脚本の1シーンを製作する撮影に取りかかった。そして上位3人の面接が行われ、ピート・ジョーンズに優勝脚本「夏休みのレモネード」を映画化するための製作費100万ドルが与えられた。

数ヶ月後に、エイダン・クイン、ボニー・ハント主演で完成したジョーンズの映画は、サンダンス映画祭でプレミア上映された。ジョーンズは全米各地を巡るプロモーションツアーを行い、自分の映画について語った。ケーブルテレビ局のHBOはエミー賞に3回ノミネートされた同局のシリーズの一環として、脚本から映画化までを描いたドキュメンタリーを製作して放送。アフレックとデイモンの目標は達成された。PGL1についてクリス・ムーアは、「人々はこの番組で、映画をつくることはどんなに大変で、最初の1本を撮るのがどんなに重圧のかかるとか、そして最後に金を払った観客に初めて自分の映画を披露するときに、どんなに報われた気分になれるかがわかつてくれただろう」と言う。2003年のPGL2、2005年のPGL3は、対象作品のジャンルを広げ、プロフェッショナルになるチャンスをさらに2つのカテゴリ一の映画製作者に与えることになった。

俳優としてのキャリアでは、アフレック（写真左）とデイモンは、才能がまだ認められずに最初の脚本を書くことを夢見ていたルームメートであった時代から、大出世を遂げた。デイモンは CIA の秘密捜査官を描いた小説を映画化したシリーズ 3 本で、主役のジェイソン・ボーンを演じた。また「オーシャンズ 11」と続編 2 本、最優秀主演男優賞にノミネートされた「グッド・ウィル・ハンティング／旅立ち」に出演し、最近のヒット映画「グッド・シェパード」「ディパーテッド」でも高く評価されている。アフレックも多忙だ。2006 年と 2007 年に公開された主演映画は「ハリウッドランド」「スモーキング・エース／暗殺者がいっぱい」など 4 本。2007 年には脚本と製作も兼ねた「Gone, Baby, Gone」で監督デビューした。

ドリュー・バリモア



©AP Images/Stephen Chernin

8 歳のときにスティーブン・スピルバーグの 1982 年の大ヒット作品「E.T.」で主人公の少年の妹ガーティを演じて一躍世界的スターになった。しかし、これは初めての役ではない。生後 11 カ月で、すでにテレビコマーシャルに出演している。ハリウッドの伝説的な俳優一家に生まれた彼女の成功は、父親がジョン・ドリュー・バリモア、祖父がライオネル・バリモア、祖父のきょうだいがエセル・バリモア、ジョン・バリモア、という伝統を受け継ぐもの。十代の若いころは、薬物乱用という問題を抱えていた上、自身が選ぶ役柄のタイプもあって、「バッドガール」のイメージがあった。だが、1996 年になってキャリアを立て直し、「ウェディング・シンガー」「25 年目のキス」「50 回目のファーストキス」となど一連のロマンチックコメディに出演。これらの作品では完全に方向転換して、内気で傷つきやすい女性を演じた。また 2001 年の「サンキュー、ボーイズ」では十代で出産して離婚を経験する女性を演じるなど、よりドラマ性のある役柄に挑戦はじめた。その一方で、製作会社を設立して大成功させ、「チャーリーズ・エンジェル」や、シンデレラ物語を現代風に解釈した「エバー・アフター」などを生み出した。最近では「ラブソングができるまで」（2007）ではヒュー・グラントと共に演している。

バリモアはイギリスのファッショントレーナー、ジャイルズ・ディーコンのコレクションの広告に起用された。2007年3月のイギリス版ヴォーグ誌に掲載されたインタビューで、ディーコンは彼女を選んだ理由をこう説明している。「彼女はとても知的で、素晴らしいビジネスウーマンで、他人の手本になる。だが、過去には過ちを犯し、それを乗り越えた人でもある。人々はそのことに反応し、敬意をいだくと思う」

またバリモアは、ドキュメンタリー作品への関心を深め、批評家の注目を集めたいいくつかのプロジェクトを指揮している。プロジェクトのひとつは、彼女の1年以上にわたるアフリカの子供たちへの食糧支援プログラムの活動とその映画製作に関するもの。バリモアは次第に飢餓に苦しむ子供の問題にかかわり、この問題と取り組む機関や団体の活動に加わるようになった。国連世界食糧計画（WFP）はバリモアのこの分野での業績を認め、2007年5月、飢餓撲滅の親善大使に任命。有名人であることを有効に利用して学校給食プロジェクトの必要性を訴えるよう求めた。バリモアは最初の任務の一つとして、米連邦議会議事堂で上院議員たちと会い、給食制度の大切さを訴えた。

バドゥル・ビン・ヒルスイー



Bader Ben Hirsi/Arab Film

写真提供 Bader Ben Hirsi and Arab Film Distribution
©AP Images/Felix Films

ロンドン育ち。彼の家族は60年代に起こったイエメン革命の際にイギリスに亡命した。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジでドラマ製作の文学修士号を取得。1995年にイエメンを訪れ、叙情的なドキュメンタリーとの呼び声高い「The English Sheikh and the Yemeni Gentleman」を撮る。この映画は、イエメンに長年暮らすイギリス人が、ビン・ヒルスイーに母国を案内する過程を追っている。

2001年9・11同時多発テロ以後、アラブ人映画製作によるドキュメンタリーが強く求められていた。ビン・ヒルスイーが手がけた作品に、2003年のドキュメンタリー「Yemen and the War on Terror」や2002年の「9/11 Through Saudi Eyes」がある。後者は、ハイジャック犯の家族や友人、アラブのメディアのトップ、政治や軍事を専門とするアナリスト、心理学

者などにインタビューし、9・11テロの結果起こったさまざまな出来事や問題に対する見解を語らせたものだ。このビデオ作品は、サウジアラビア側の視点から9・11テロを詳細に眺めた初のドキュメンタリー。ケンブリッジ大学教育コアカリキュラム・ビデオコレクションの社会研究セクションに収められ、「政治科学、中東、イスラム圏について勉強する学生にとても役立つ教材になる」と説明されている。

その後、ビン・ヒルスィーは一般的な長編映画に方向転換した。「古きサナアの新しき日」は2005年カイロ国際映画祭で最優秀アラブ作品賞を受けた。この映画はニューヨークのアルワン映画祭（現在はニューヨーク・アラブ&南アジア映画祭という）で上映された。ビン・ヒルスィーはこの映画の初期の製作段階ではイエメン政府から許可と資金を受けたが、同国の文化大臣はイエメンでの商業的公開を認めなかった。しかしサナアで開かれた映画祭でイギリス作品として上映されている。

ビン・ヒルスィーは中東地域で映画を製作するという自分の経験が、他のアラブ人映画製作者、とりわけ映画の伝統がほとんどない保守的な湾岸諸国にいる製作者を勇気づけられればと願っている。彼はこれまで、ヨーロッパや北米で映画を勉強して母国に戻り、苦労しながら映画を撮っている若手監督たちと会ってきた。「アラブ映画の新しい動きがある」と、ビン・ヒルスィーはイギリス拠点の映画専門サイト「ネトリビューション」のインタビューで語っている。「新しくて胸が躍るようなスタイルだ。世の中は変わりつつある」

独立系の台頭

ケネス・トゥラン

現代の米国における独立系映画業界は、数人の勇気ある監督が自費を投じて、ハリウッドの映画会社が資金提供しようとしなかった作品を製作したときに生まれた。しかし、大抵は低予算ながらも上質なこれらの作品は高く評価されるため、独立系映画産業は成長し、繁栄するようになった。ケネス・トゥランはロサンゼルス・タイムズ紙と全米公共ラジオの番組「モーニング・エディション」の映画評論家。「Now in Theaters Everywhere: A Celebration of a Certain Kind of Blockbuster」(2006) や「Sundance to Sarajevo: Film Festivals and the World They Made」(2002) など著書数冊。



デルタ航空はジョージア州の8大学で映画製作者志望の多くの学生を励ます 2004 年の映画祭を後援。中には初めて製作した学生もいる。セーラ・ウィットマーシュはジョージア大学の学生組織の映画を撮った。

©AP Images/John Bazemore

独自の映画産業を持つ大部分の国や地域は、自分たちを幸運だと思っているだろう。活気を呈している地域としてインドや香港がすぐに思い浮かぶが、米国は、今後も発展しそうな映画産業をひとつならず 2 つも持っているという意味で特権的立場にある。

まずは映画が上映されているところならどこでも知られている本場ハリウッドの映画産業だ。ここから「スパイダーマン」「パイレーツ・オブ・カリビアン」などのブロックバスターが世の中に送り出される。製作費数億ドルをかけて作られるこれらの作品は、世界で数十億ドルを稼ぎ、ほとんど際限なく続編を生み出す。

しかし、20 年余り前から、これと平行して発展し成功を収めてきたもうひとつの米国の映画産業が、独立系映画界である。毎年、この業界独自の映画祭（ユタ州パークシティのサンダンス映画祭）が開かれ、オスカーのインディーズ版「インディペンデント・スピリット賞」もあり、授賞式はアカデミー賞の数日前に行われる。独立系専門の劇場もあり、独立系の仕事を中心に活動する俳優や監督もいる。

とはいっても、米国映画界を構成するこれら 2 つの業界がまったく共生していないわけではない。それどころか、活発な共生関係にある。トム・クルーズがポール・トマス・アンダーソンの「マグノリア」に出演したときのように、ハリウッドの大スターが独立系作品に出たことで賞賛されたりする。反対に「アルマゲドン」「アイランド」といった従来型のブロックバスターに出演した筋金入りインディーズ俳優であるスティーブ・ブシェミのように、独立系の俳優がハリウッド映画に居場所を見つけることもある。さらに、独立系作品は最もハリウッド的なイベントであるアカデミー賞に大きな影響力を持つようになっている。

それでも、最終的にハリウッドと独立系を区別する基本的な要素が 2 つある。ひとつは映画の製作費であり、もうひとつは作品そのものの感性とテーマである。米国の映画界では、常にこの 2 つが結びつけて考えられる。

芸術性の強調

映画会社の製作する平均的作品は製作費が 1 億ドルを超えるが、そのような場合、製作費回収のために、米国内だけなく国外においても可能な限り広範囲の観客を引きつけなければならぬ。つまり、どこの観客でも好反応を示すアクションや、最も映画をよく見る 25 歳以下の若者層にアピールする要素を強調することになる。一方、独立系作品のコストは安い。製作費は数千ドルから 1500～2000 万ドルまでといったところだ。それでも大金に思われるかもしれないが、ハリウッドの基準ではたいしたことではない。そして低予算であるからこそ、作品をより個人的なもの、より独特なものにすることができる、また爆発シーンよりもキャラクターとストーリーに重きを置くのも自由というわけだ。またこれらの映画は、興行収入よりも芸術性や自己表現を重視する。アカデミー賞では、高利益をあげる大ヒット作よりも、得てして独立系映画が健闘する理由のひとつはここにある。

40～50 年前に米国の映画ファンが映画の中でこの種の経験をしたいと思ったときは、外国映画を見るしかなかった。1950 年代と 1960 年代にフランス、イタリア、日本、北欧などの映画の観客が増えたのはこれが一因である。

米国の観客が同じような経験ができる母語による独立系映画は、突然出現したわけではない。俳優で監督でもあった故ジョン・カサベテス（インディペンデント・スピリット賞には個人名を冠した唯一の賞「ジョン・カサベテス賞」がある）は、伝説的な「アメリカの影」を撮った 1957 年にはすでにインディーズ・スタイルの作品を手がけていた。

ジョン・セイルズの「セコーカス・セブン」（1980）を、現在の独立系映画の流れをつくり出した最初の作品として評価する人も多い。製作費は 6 万ドル。セイルズ自身が映画会社の脚本を書き直すなどして資金を調達した。この作品は最終的に 200 万ドルの収益をあげた。これによって初めて、映画会社のシステムに頼らなくても収益と創造性を両立させられることが証明された。



脚本家で監督のジョン・セイルズ。

©AP Images/Krista Niles

独立系の確立

独立系の業界大手であるミラマックス社（ハーベイとボブのワインスタイン兄弟が設立して、両親の名前を組み合わせて社名にしたもの）が配給した2つの作品は、独立系映画の定着をはっきりと印象づけた。1989年、スティーブン・ソダーバーグの「セックスと嘘とビデオテープ」はサンダンス映画祭で審査員賞、カンヌ映画祭で最高賞のパルム・ドールに輝き、米国の独立系映画を世界に知らしめた。

クエンティン・タランティーノの「パルプ・フィクション」はさらにその一步先を行き、1994年のパルム・ドールを受賞したばかりか、興行収入が1億ドルを突破した最初のインディーズ映画になった。その前年にミラマックスを買収していたディズニーの先見の明を裏付ける出来事だった。

独立系作品を製作するには、自分たちの常駐スタッフではあまりにも勝手が違いすぎると悟った映画会社は、こぞって傘下に独自のインディーズ部門をつくろうとした。現在、業界では「特殊専門部門」として知られるこうした会社には、フォックス・サーチライト、ワーナー・インディペンデント・ピクチャーズ、ユニバーサル・フォーカス、伝統あるソニー・ピクチャーズ・クラシックスがある。

このような特殊専門部門からは、ビッグな予算とビッグなスターを投入した第一級の独立系作品が生み出される。これらはハリウッド映画と大差ないように思えるが、実際のところ、ハリウッドはこうした作品をもはや製作しない。良い例が「リトル・ミス・サンシャイン」だ。これは、2007年2月のアカデミー賞で最優秀作品賞にもノミネートされ、脚本賞受賞に落ちていた映画だが、大手スタジオからは何度も製作を断られていた。

独立系作品は感性が独特であるばかりか、さまざまな人々の姿を映し出し、さまざまなストーリーを語ることができる。独立系映画の分野では莫大な製作費を必要としないので、アフリカ系米国人のスパイク・リー、同性愛者のグレッグ・アラキなどの監督が社会の片隅にいる人々を主人公にして幅広い観客に訴える力のある作品を生み出すことができたのだ。

デジタル効果

独立系ドキュメンタリーも勢いをついているが、これにもコストが関係している。現在、かつてないほど、多くの独立系ドキュメンタリー作品が製作され、多くの観客の心をとらえている。それにはいくつか理由があるが、重要な決め手は、撮影コストが安くあがるデジタル機器が、ドキュメンタリー映画作家の製作手段として手に入るようになったことだ。

その好例が、ミュージックビデオやコマーシャルフィルムの監督スコット・ハミルトン・ケネディである。彼がカリフォルニアの高校でソーントン・ワイルダーの芝居を上演しようとしている教師に出会わなかったら、高い評価を受けた「OT: Our Town」は生まれなかっただろう。女性教師からプロジェクトを聞かされたケネディは、なんとしてもその過程を記録しようと考えた。「資金を調達したり、スタッフを集めたりしなかった」と彼は言う。「そんな努力をして時間を無駄にすれば、今この瞬間を記録せずに逃してしまったから」

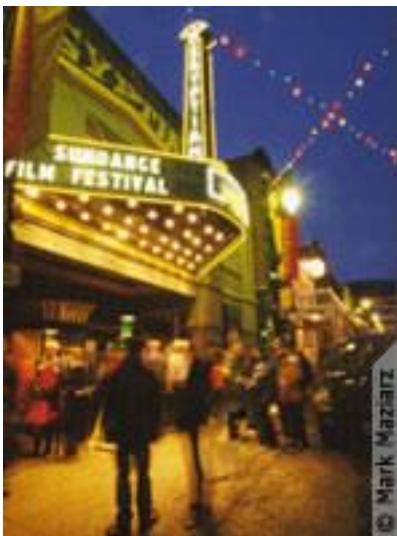
ケネディは、本人の言葉によれば家電チェーン店「サーキット・シティー」で買えるような目立たないカメラを持って、高校に通った。被写体を緊張させないそのカメラのおかげで、まわりの生徒たちをリラックスさせることができ、作品の最大の長所となった親密さと信頼が生まれた。

資金に縛られないおかげで自由な考え方ができる独立系映画は、結果的には、近年米国でつくられた映画の中でも最高級の作品を生み出している。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を反映するものではありません。

サンダンス映画祭——世界の独立系映画製作者の活動を応援

サンダンス映画祭と主催団体サンダンス・インスティテュートは、世界の独立系（インディーズ）映画製作者たちを応援し、存在が知られる機会を提供する。



映画ファンは毎冬、ユタ州パークシティーで開かれるサンダンス映画祭に押し寄せる
©Mark Maziarz

米国で高く評価されている 10 日間にわたるサンダンス映画祭は毎年 1 月、ユタ州パークシティーの雪深い山間で開催される。サンダンスは、当初は駆け出しの独立系映画製作者による作品を紹介することを目的としたが、やがてパネル・ディスカッション、若者向けプログラム、オンライン上映、ライブ演奏などを含むイベントに成長した。毎年、世界から集まる参加者は 4 万 5000 人以上。1985 年のスタート以来、サンダンスで上映された米国や各国の独立系作品は、何度もアカデミー賞の候補となり、実際に受賞している。評判が高まる一方のこの映画祭には、各国から有名人が上映会にやってくる。上映される作品は質が高いために、多くの関係者が刺激され、ハリウッドの基準よりはるかに少ないギャラで独立系映画に出演したり、メガホンを取ったりする。

米国や各国の作品を対象にしたドキュメンタリー部門とドラマ部門があり、審査員大賞と観客賞は映画祭最終日に発表される。審査員たちは映画分野で活躍する現役の著名アーティストだ。授賞対象は脚本、演技、監督、撮影で、特別賞もある。映画祭で紹介される作品のすべてがコンペティションの対象というわけではない。配給先を探すために特別なプレミア上映や一般上映用に選ばれる作品もあり、ショートフィルムはカテゴリー別に上映され、サンダンス映画祭のウェブサイトで見ることもできる。 [<http://festival.sundance.org/2007/>]

2007 年、サンダンスで上映された米国や世界各国のドラマやドキュメンタリーは 64 本。しかも米国人監督によるドラマ 5 本には、主としてスペイン語、ヒンディー語、韓国語、ポルトガル語、マスコギ語（米先住民の言語）を話すキャラクターが登場した。応募作品は長編だけでも 3000 本を超え、その大半は世界的な問題をテーマにしていた。サンダンスで大きな存在

感を示している会社はフランスのゴーモン、セルロイド・ドリームズ、ワイルド・バンチ、ドイツのババリア・フィルム・インターナショナル、デンマークのトラスト・フィルム・セールズ、そしてアムステルダム、ロンドン、シドニー、香港にオフィスを置く国際企業フォルティッシモ・フィルムズだ。伝えられるところによれば、サンダンス映画祭のディレクターであるジェフリー・ギルモアは、2005年に米国以外の長編やドキュメンタリー映画を対象にしたコンペティション部門の賞を創設した際、サンダンスは意識的に国際的な注目を高めるための手段を講じると述べたという。

映画祭の主催団体であるサンダンス・インスティテュートは、俳優・監督としてさまざまな賞を受賞しているロバート・レッドフォードによって1981年にパークシティーに設立された。このインスティテュートが重要であるのは、大胆で最先端をいくスタイルやテーマの作品を紹介するからだけではない。広い国際マーケットを提供して、大小の配給会社や販売会社に独立系映画を買わせ、世界の映画館で上映させるからだ。



©AP Images

俳優・監督でサンダンスの設立者であるロバート・レッドフォード
©AP Images/Kevork Djansezian

サンダンス・インスティテュートは年間を通じて、独立系の映画作家、脚本家、作曲家、劇作家、舞台芸術家の活動を支援する上映会やプログラムを数多く後援している。ドキュメンタリー映画のプログラムは、ノンフィクションの斬新なストーリーづくりの検討を奨励し、ドキュメンタリー作品がますます多くの人の目に触れるよう観客の拡大を図っている。また、人気部門の長編映画プログラムには、毎年、米国や各国から新人の映画製作約25人が参加している。このプログラムは、脚本家や映画監督のための実習と後期製作（ポストプロダクション）を通して独立系プロジェクトを支援する。また、創造面や実際面での継続的なアドバイスや、奨学金制度による経済的支援も行っている。映画音楽部門のプログラムは新人作曲家をインスティテュートに集め、演劇部門プログラムは舞台アーティストの多様な芸術的表現を育成し、独創的でクリエイティブな活動を援助する。インスティテュートはカリフォルニア大学ロサンゼルス校に独立系作品のコレクションを所有している。

リビングルームの映画祭

米国を含む9カ国で、世界各地のドキュメンタリーを紹介する2つのシリーズがテレビ放送されている。製作側は近い将来、放送規模の拡大を計画している。



「インディペンデント・レンズ」の作品「The Wild Parrots of Telegraph Hill」のシーンから。© Daniela Cossali/ITVS

インディペンデント・テレビジョン・サービス（ITVS） [<http://www.itvs.com>] が製作するドキュメンタリーは、公共放送サービス（PBS）の加盟局を通して全米で放送される。シリーズ名は「インディペンデント・レンズ」で、米国や外国の作品を集めている（番組情報は [<http://www.pbs.org/independentlens/about.html>]）。このシリーズを「現代のテレビで紹介される独立系映画最高のショーケース」と呼んだ批評家もいた。現在サンダンス・チャンネルを放送しているケーブル局は数局にすぎず、サンダンス・チャンネルを見られない視聴者にとってはとりわけ貴重なシリーズだ。ITVSは「リビングルームの映画祭」とうたっている。

このシリーズは毎シーズン、米国以外の国で活動したり暮らしている人々の手になる作品が、全体の約5分の1を占める。米国人でない製作者が自分の国や文化や国民について語る映画は増えている。2006～2007年のシーズンの「インディペンデント・レンズ」には、例えば、イスラエルに住む17歳のイスラム教徒の少女が、宗教へのかかわり方と空手の世界選手権優勝を期待する周囲との折り合いに苦労する姿を描いた「Shadya」、7人に1人近くの女性が出産時に死亡するアフガニスタンで産科医として苦闘する（この映画の監督）の父親を見つめた「Motherland Afghanistan」、40年以上にわたってキューバで暮らし、革命から現在の生活まで母国の光景を詳細に撮影してきた写真家5人を紹介する「Revolution: Five Visions」など、国際色豊かな作品が含まれていた。

このシーズンに紹介された作品はほかに、「おいしいコーヒーの真実(Black Gold)」「Calicot」「チャイナ・ブルー(China Blue)」「Democracy on Deadline」「The Global Struggle for an Independent Press」「Beyond the Call」「The World According to Sesame Street」「Paris, 1951」「The Wild Parrots of Telegraph Hill」「エンロン 巨大企業はいかにして崩壊したのか?(Enron: The Smartest Guys in the Room)」「ミリキタニの猫」などがある。

「インディペンデント・レンズ」の司会は、長年にわたって映画スターたちが務めてきた。現在の司会者は、「ハッスル&フロウ」「クラッシュ」で主演し受賞歴もあるテレンス・ハワード。これまでの司会者にはイーディ・ファルコ、スザン・サランダン、ドン・チードル、アンジェラ・バセットらがいる。

もうひとつ、これと同系統のシリーズで外国の視聴者向けに製作されているのが「トゥルー・ストーリーズ／ライフ・イン・ザ・USA」。16本のドキュメンタリー作品からなる画期的なシリーズで、司会はベニチオ・デル・トロ。外国の視聴者に米国の人々や土地を紹介している。独立系映画製作者によるこれらの作品は、米先住民居留地やメキシコ国境などを舞台にして、サーファー、詩人、漁師、炭鉱夫などを取り上げ、豊かで複雑な米国の姿を伝える。

「トゥルー・ストーリーズ」は各国の放送局と緊密な関係を持ち、独立系ドキュメンタリーを見る機会の少ない国々の視聴者に、ニュースや商業ベースのメディアからはなかなか知ることのできない米国の実体を無料で伝える。2006年、公共放送を通じて「トゥルー・ストーリーズ」が放送された国は、ペルー [<http://www.irtp.com.pe>]、マラウィ、エジプト [<http://www.ertu.gov.eg>] だった。2007年には、コロンビア [<http://www.rtvc.gov.co>]、バーレーン [<http://www.bahrainityv.com>]、インドネシア [<http://www.tvri.co.id>]、バングラデシュ、香港に拡大。年ごとに放送される国数が増やされる計画だ。

今シーズンの作品は、「American Aloha: Hula Beyond Hawaii」「Downside Up」「Family Undertaking」「First Person Plural」「In My Corner」「In the Light of Reverence」「Kiss My Wheels」「Larry vs. Lockney」「Los Angeles Now」「Maid in America」「On a Roll」「Family, Disability, and the American Dream」「Outside Looking In」「Transracial Adoption in America」「The Split Horn」「Life of a Hmong Shaman in America」「Summerstock」「Taking the Heat」「The First Women Firefighters of New York City」「Troop 1500」など。



イスラエル北部の小さなイスラム教徒の村に暮らし、空手の世界チャンピオンを目指す17歳の少女を描いた「Shadya」。写真提供 Budoco, Ltd. /ITVS

デジタル革命

スティーブン・アッシャー

映画監督が映画用に奇抜な新しいタイプの映像を作るために初めてデジタル技術を使ったのは、1980年代のことだった。それ以来、映画に使われる機器はますます高度化し、映画の製作、マーケティング、配給のデジタル化が可能となった。スティーブン・アッシャーは、「ソー・マッチ・ソー・ファースト(*So Much So Fast*)」(2006年) やアカデミー賞にノミネートされた「トラブルサム・クリーク：ミッドウェスタン(*Troublesome Creek: A Midwestern*)」(1996年)など、長編ドキュメンタリーを手がける映画監督である。ベストセラー本「映画監督用ハンドブック：デジタル時代のための総合ガイド(*The Filmmaker's Handbook: A Comprehensive Guide for the Digital Age*)」の著者でもある。



巨大な iPod の前を歩くアップル・コンピューターの CEO スティーブ・ジョブス
©AP Images

映画の歴史では、新たな技術の出現がすべてを変える決定的瞬間が何度もあった。1927年に製作された初のトーキー映画「ジャズ・シンガー(*The Jazz Singer*)」が、映画における「音の時代」の幕開けを告げた。無声映画のスターは廃れ、新しいタイプのスターとストーリーに人気が集まるようになり、映画の脚本の書き方、撮り方、見せ方が変化した。今日、デジタル技術は、これよりもさらに重大な、全世界を揺るがせる革命をけん引している。こうした変化がいかに大きな影響を及ぼしてきたかは、インターネット時代に育った若者たちは知る由もない。映画は、いや、あらゆるメディアががらっと変わらんだろう。

デジタル化の技術的な意味は、映像と音声を、コンピューターで保管、操作、送信することができるデジタルデータ（1と0）に変換することである。デジタル形式にすることで多くの可能性が開けてくる。

新しい現実

映画界にデジタル化の時代が到来したのは1980年代だが、その勢いを増したのは1990年頃であった。当初から、デジタル技術は新しいタイプの映像を創り出すために使われた。映画監督のジョージ・ルーカスの会社であるインダストリアル・ライト・アンド・マジック社は、とてつもなく空想的な宇宙の物語を驚くほど現実的に見せる、見事な視覚効果の先駆けとなつた。現在私たちは、「フォトショップ」のようなソフトウェアを使って、例えば人物を削除し

たり建物を追加するなど、写真をデジタル処理して修整することができる。それによって、写真に映した現実に対する私たちの基本的理解が一変した。デジタル時代においては、「写真是嘘をつかない」とか「百聞は一見にしかず」という言葉が真実ではないことは明らかだ。デジタル編集システムは、非常に短いショットの利用、画面上を飛び交うコンピューターグラフィックス、別の物体へ切れ目なく変形（変身）する物体など、新たな映画製作スタイルや技術の確立に役立った。今日のテレビコマーシャルのほとんどは、デジタル機器を使わずに同じように見せることが不可能である。

1990年代には、素人でもあまりお金をかけずに非常に良質のビデオを撮影・編集できるデジタルビデオと、今ではおなじみのミニ・デジタルビデオ・カメラが急増した。独立系の映画監督がデジタルビデオ・カメラを使って映画を製作するようになり、こうした映画が突然、テレビや権威ある映画祭で上映されるようになった。従来のハリウッド式映画製作では、多数のスタッフが大型35ミリフィルムカメラを使って撮影が行われる。デジタルビデオの画質は35ミリには及ばないが、それでも十分な高品質で、価格も安価なので、以前は不可能あるいは途方もなく高価だったさまざまなフィクションやドキュメンタリーのプロジェクトも、デジタルビデオで製作することができる。

デジタルビデオの人気が高まったように、インターネットの利用も増加した。ハリウッドは当初、インターネットをどう利用すればよいのか分からなかった。1999年に小型ビデオカメラで撮影された低予算のスリラー映画「ブレア・ウィッチ・プロジェクト(The Blair Witch Project)」は、インターネットのマーケティング力をうまく利用した最初の映画とされている。プロデューサーたちが、映画で描く恐怖が事実であることをインターネット上でほのめかして、大きな議論を引き起こしたため、映画の世界総売上高は2億4800万ドルに上った。今日では、ウェブサイト、ブログ、オンライン批評、マイスペース・ドットコムなどのサイト上での意見交換は、新作映画の「話題性」を高めるための不可欠な要素となっている。

インターネットによって、新しい映画の製作と配給方法が可能になった。映画の大半は、映画スタジオ、テレビ放送局、あるいは大手配給会社などの大企業によって製作・配給されている。しかし、インターネットのおかげで、特定の観客向けに映画を製作し、DVD（デジタル・ビデオ・ディスク）を彼らに直接販売することが可能になった。これにより、万人受けしないことを理由に、プロジェクトを拒否することが予想される管理者を通さずにつむ。配給の専門家であるピーター・ブローデリックは、高校のレスリングを描いたドラマ「リバーサル(Reversal)」は、劇場やテレビで一度も上映されたことはなく、ビデオショップでも扱っていないが、インターネット上のDVDと関連商品の売り上げは100万ドルを超えたと言う。クリス・アンダーソンは、著書「The Long Tail: Why the Future of Business Is Selling Less of More（邦題：ロングテール－売れない商品を宝の山に変える新戦略）」の中で、インターネットのおかげで、プロデューサーと配給会社が、通常の小売店では販売数が少なくて扱うことができない作品で、ニッチの観客を狙うことが可能になった事情を説明している。DVDなどの物理的な商品を販売・レンタルするシステムから、電子ファイルをダウンロードするシステムへの移行が進むにつれて、販売数が少なく、ユニークなタイプの作品を製作して利益を上げる能力が高まる。



ジョージ・ルーカスは、配信の未来についての洞察から特殊撮影に至るまで映画産業の技術的な発展を導いた。
©AP Images

デジタル配信

一方、最近のハイビジョンテレビ(HDTV)の進歩は、画質・音質に飛躍的な改善をもたらした。最近、電器店に行ったことがあれば、新型フラットパネルの画面がいかに鮮明で、色鮮やかで、巨大かを知っているだろう。デジタル映像の各フレームは、ピクセルと呼ばれる細かな光の点で構成されている。ピクセル数が多ければ多いほど、特に大画面で映し出す場合には、画像の鮮明さと質が高まる。従来型の標準画質映像の場合、各フレームに約34万5000個のピクセルが使われる。最高のハイビジョンシステムでは、その数は約200万個である。美しく撮影された大画面の映画をハイビジョンで見てしまうと、もう旧式の標準画質で見たいと思わなくなるだろう。

ハイビジョンは、ハリウッド映画とテレビ番組を一変させた（これもまた、ジョージ・ルーカスが開発したカメラ技術を使っている）。以前はフィルムで撮影されていたプロジェクトの多くは、現在では、時間と費用を節約するためにハイビジョンで撮影される。今では、品質も向上しているため、通常観客がその違いに気付くことはない。現在のほとんどすべての映画は、製作段階のどこかでデジタル処理されている。

デジタル技術を劇場にまで持ち込もうとする映画スタジオのグループが、「デジタルシネマ・イニシアチブ」を設立した。現在、映画館に行くと、おそらくフィルムを使った映写機で映し出される映画を見ることになる。新しい「4K」デジタルプロジェクターは、900万個近くのピクセルを使用し、決して傷ついたり汚れたりしない素晴らしい画像を生み出す。映画館は、この高価な機器への投資に抵抗してきたが、スタジオにしてみれば、重い上映用フィルムの製作や出荷を行わないことで何百万ドルも節約できるため、最終的には彼らが機器の費用を援助することもありうる。しかし、ハリウッドは、新作映画がデジタル形式で公開されると、海賊版が作られるのではないかと恐れている。海賊版の作成は深刻な問題である。先ごろジェームス・ボンド映画の最新作が外国の映画館で上映されたとき、DVDの海賊版がすでに路上で売られていた。

しかし、劇場がデジタル時代への態勢を整えているように、消費者が映画を鑑賞する選択肢も、居間ではフラットパネル大画面、机では小さなコンピューター画面、外出先では iPod や携帯電話の極小画面というように、爆発的に増えている。デジタルテレビは、すでに新しいハイビジョンチャンネルや標準画質チャンネルを持つものが販売されており、米国では 2009 年 2 月 17 日に、従来のアナログ方式テレビからデジタルテレビへの完全な切り替えが行なわれる。ビデオ・オン・デマンド、ダウンロード、TiVO、ウェブキャストによって、ほとんどすべてのものを、いつでもどこでも見られるようになるのは、もう間もなくのことだ。これで、映画館に行って、笑ったり泣いたりするほかの観客に囲まれながら映画を見るという、世界中に広まつた素晴らしい伝統が終わるのだろうか。

またしても、先駆者としてのジョージ・ルーカスに期待がかかっている。映画の劇場公開は極めてリスクが高く費用もかかるため、スタジオは超大作志向とならざるを得ず、できるだけ幅広い観客に受け入れられる作品（あるいは、見方によっては大衆向け作品）を製作する。それでも、ほとんどの映画が映画館で損失を出している。おそらく誰よりも多くの超大作を手がけたルーカスは、ディリー・バラエティ紙に「もう映画は作りたくない。テレビをやろうとしているところだ」と語った。映画 1 本の製作には 1 億ドルと、映画館への配給にさらに 1 億ドルかかるが、テレビとインターネット上で配信用であれば、同じ費用をかけて 50 本から 60 本の映画を製作できる、と彼は言う。観客が映画館に足を運ぶことについては、将来的には「習慣ではなくなると思う」とルーカスは言う。

デジタル技術は、基本的にはフィルムを 1 と 0 の連続に変換する方法にすぎないと考えると、この技術が映画の製作方法、ストーリー、鑑賞する場所、製作費用、観客を大きく変えたことは、ショックであり驚きでもある。さらなる技術的進歩に備えよう。

この記事に述べられている意見は、必ずしも米国政府の見解または政策を反映するものではありません。

環境保護活動に取り組むハリウッド

ロビン・L・イエーガー

映画業界では、個人から大手スタジオに至るまで、環境に優しい活動を採り入れるようになっている。ロビン・L・イエーガーは米国務省国際情報プログラム局の専属ライター兼「社会と価値観」の副編集長。

映画製作は、特に環境問題の点から見れば厄介な事業といえる。「ライト、カメラ、アクション」という言葉には、通常、一時的にしか使わない撮影用の建物やセットをつくり、台本を何百部も印刷し、スタッフの食事を確保し、冷暖房を調整しなければならない、という意味が込められている。さらに、アクション・シーンには爆発と点火装置が不可欠である。照明は電力を食うし、人や物の移動には車にしろ飛行機にしろ必ず何らかの輸送手段を使わなければならぬ。デジタル技術ですら、特殊装置の製作・使用・廃棄処分によって環境問題を引き起こしている。

カリフォルニア南部の巨大産業のひとつとして、映画産業は歴史的に地域の環境汚染の一因となってきた。しかし今では、ハリウッドにはビジネスのあり方を変えようと懸命に努力している人たちがたくさんいる。環境に対する関心は、大手映画会社の上層部や職員から個々の俳優、アーティスト、実務担当者に至るまで、さまざまな関係者に広がっている。

映画会社

率先して環境対策を導入している映画会社経営トップには、ワーナー・ブラザーズの社長兼最高執行責任者アラン・ホーンや、ユニバーサル映画の社長兼最高執行責任者ロン・マイヤーがいる。ユニバーサルは3%の温室効果ガスの削減を約束し、テーマパークのディーゼル電車を環境に配慮した乗り物に交換するなど、さまざまな措置を講じている。

ワーナー・ブラザーズはこれまで14年以上にわたって環境問題に力を入れており、環境対策担当の重役もいる。同社の環境保護活動はゴミの削減やリサイクルから始まったが、今では広範囲なプログラムに発展している。概要はウェブ・サイト

[www.wbenvironmental.com] を参照。メニューから「エコ・ツアーエコ-Tour)」を選ぶと、環境問題対策部長のシェリー・ビリクが登場し、ワーナー・ブラザーズの取り組みについて語る。ビリクは映画事業のさまざまな特徴を説明し、同社が実施した対策を挙げ、環境保護政策は地球によいだけではなく、ビジネスにとっても有益であると述べている。



ワーナー・ブラザーズの環境対策は業界随一。その取り組みについて話す同社のシェリー・ビリク。 ©2007 Warner Bros. Entertainment Inc. 転載禁止

映画作品

ジョージ・クルニーがアカデミー助演男優賞を受賞した長編映画「シリアナ」には環境的テーマが含まれ、やはりアカデミー賞を受賞したドキュメンタリー映画「不都合な真実」では、元副大統領のアル・ゴアが世界中の観客に地球温暖化の問題を提起した。どちらの映画でも、映画製作者たちが全プロジェクトの「カーボンニュートラル」に挑戦している。カーボンニュートラルとは、プロジェクトのエネルギー消費によって生じる温室効果ガスの排出量を、それに相当する分だけ、一定数の木を植えたり、太陽エネルギーなど再生可能な代替エネルギーに投資して、相殺することを意味する。

個人の活動

俳優や映画製作者は、役柄や企画を選ぶ際に環境保護を念頭においたり、問題をアピールするために自分の立場を利用したり、環境保護運動を財政的に支援したりしている。環境問題に積極的にかかわっている映画人のひとり、ロバート・レッドフォードには、その活動に対して数多くの賞が贈られている。またレッドフォードの所有するケーブルテレビのサンダンス・チャンネルは、最近、環境問題を扱った「The Green」という番組を毎週シリーズで開始した。レオナルド・ディカプリオは、地球環境の現状を知らせる長編ドキュメンタリー映画「The 11th Hour」のプロジェクトを手がけた。この映画は2007年に公開される予定だが、ディカプリオはほかにも環境をテーマにしたリアリティ番組や環境問題を扱った短編映画の製作に取り組んできた（[\[www.leonardodicaprio.org\]](http://www.leonardodicaprio.org) を参照）。また、脚本家で監督でもあるポール・ハギスは、職業人としての活動ではもちろんのこと、私生活でも太陽発電の家に住み、ハイブリッド車を運転するなど、環境に配慮して暮らしている。ほかにも、ローリー＆ラリー・デービッド、ロブ・ライナー、トム・ハンクス、ハリソン・フォード、ノーマン・リガー、キヤメロン・ディアス、ダリル・ハンナなど、環境保護活動で知られる映画人は多い。

映画芸術科学アカデミーは2007年アカデミー賞授賞式という格好な機会をとらえ、式そのものが環境に配慮して行われたと述べ、視聴者にアカデミー賞のHP [www.oscar.com] や天然資源防衛委員会のサイトにアクセスして詳しい情報を得るように勧めた。



ジョージ・クルーニーは自分が製作・出演した映画「シリアナ」でアカデミー助演男優賞を受賞。この作品は最初期のカーボンニュートラル映画の一本。

©AP Images/Alastair Grant

政府と映画

映画などの文化事業を政府が監督している国は多いが、米国には映画産業を管理する官庁がない。それでも、政府はさまざまな形で映画産業と連携している。

映画の製作

米国では、一般に、映画は2つの製造元から供給される。ひとつは、毎年多数の映画やテレビ番組を生み出す大手の映画会社。もうひとつは学生からベテランに至るまでの独立系映画製作者である。独立系製作者は、大学や芸術・人文科学関係の振興団体の助成金という形で、地方・州・連邦レベルの政府供出金から間接的に援助を受けることがあるが、それより多いのは、民間の投資家や、芸術の推進やその映画の唱える主張に関する社会貢献団体からの資金提供である。

米国には映画の監督官庁はないが、映画産業に協力している役所はたくさんある。州や地方レベルでは、役所の映画担当部署が地元でのロケを推進している。その土地が映画撮影に使われれば、雇用などの経済効果をもたらし、観光名所の宣伝にもなり、土地の好感度アップにつながるからだ。映画会社はこうした部署の助けを借りながら、警察その他の機関と協力しながら、交通に影響を及ぼすとか、公共の建物を使用するといった特別な配慮を要する撮影の準備を整える。

同様に、政府機関、特に軍の諸部門には、映画会社が施設や装備だけでなく人材も利用できるよう便宜を図る部署がある。例えば、映画の製作で、それらしく見える空母を造ったり、本物そっくりの陸・海・空軍の兵士や海兵隊員のエキストラを雇ったりして、映画のバックに配するのは困難なのだ（兵士たちの髪型や運動レベル、姿勢などは、民間人の俳優と違うことが多い）。軍は認可された企画については、理にかなった範囲で施設を利用できるようにし、どの部門にもこのような要求を処理する部署を置いている。軍以外の行政部門では、記念建造物や公園など公共のスペースや建物を使用したいという要求に応えているところもある。



この映画はテキサス州映画委員会の協力でつくられている。©AP Images/Donna McWilliam

米国政府は数十年前には長編映画を製作していたし、戦時中には国民の士気を高める映画をつくるためにハリウッドと緊密に協力していた。しかし、第2次世界大戦後、財政的事情に思想的問題が重なり、この種のプロジェクトは廃止された。唯一の例外は、国内でも国外でも、明らかに政府関係者以外の観客を対象として政府機関が実施してきた活動である。例えば、米国情報局は長年にわたって、ほかの教育プログラムを補足する目的で海外の観客を対象にした映画を製作してきた。そのひとつが「ケネディ大統領、稲妻の2年10ヶ月(John F. Kennedy: Years of Lightning, Day of Drums)」である。これは暗殺された大統領を追悼した映画で、優秀ドキュメンタリー作品として、1965年のアカデミー賞を受賞した。現在では、情報局は国務省の一部に組み込まれ、もう独自に映画を製作することはない。

検閲

時代によって、特に国家安全保障が緊急の課題であった第2次世界大戦中には、ある種の情報は広まらないように制限されたことがあった。しかし、検閲に関しては、政府はおおむね不干渉の立場を守っている。映画業界が言論の自由の問題と公共の福祉や一般大衆の嗜好という側面を天秤にかけて自主的に基準を定めた結果、レーティング・システム（評価方式）が生まれた。Gは年齢制限がなく誰が見てもいい映画、Rは年齢制限のある映画（17歳未満は親の同伴が必要）など、いくつかのカテゴリーがあるが、政府ではなく業界の検閲機関がこの評価方式を映画に適用して、観客や親や劇場主がその映画にセックスや暴力のシーン、あるいは下品な言葉が含まれていないかなど、容易に判断できるようにしている。

映画の配給

今日、米国で製作される映画は、ごくまれな例を除いて、市場に支配される商業ルートを通じて国内および国外に配給される。映画が観客に受けなければ上映期間を短縮され、代わって、ヒットを期待される別の映画がかけられる。20世紀前半には、米国理想的の紹介に役立ちそうな映画を海外に送り出す際に何らかの形で政府の援助があった。こうした取り組みは今では大幅に縮小されて、国務省内の小さな部署で扱われる程度にとどまっている。この部署は、例えば、在外米国大使館がその国の文化省や大学などのスポンサーと協力して商業映画の上映会を催す場合、映画の入手を助けるなどの活動を行う。このような方法で、米国政府は外国で開催される映画祭やその他のイベントの計画を支援している。



映画製作者は軍の特定部署を通じて軍事基地や装備を利用することができます。例えば映画「パール・ハーバー」のこれらのシーンには、そうした基地や装備が使われた。

©AP Images/Honolulu Advertiser, Jeff Gebhard

参考文献

- Allen, Michael. *Contemporary U.S. Cinema*. New York: Longman/Pearson Education, 2003.
- Ascher, Steven and Edward Pincus. *The Filmmaker's Handbook: A Comprehensive Guide for the Digital Age*. Revised ed. New York: Plume, 1999. [Third edition to be published in July 2007.]
- Bordwell, David. *The Way Hollywood Tells It: Story and Style in Modern Movies*. Berkeley: University of California Press, 2006.
<http://www.loc.gov/catdir/enhancements/fy0623/2005025774-d.html>
- Diawara, Manthia and Mia Mask, eds. *Black American Cinema 2*. New York: Routledge, 2006.
- Emmons, Mark. *Film and Television: A Guide to the Reference Literature*. Westport, CT: Libraries Unlimited, 2006.
Table of Contents: <http://www.loc.gov/catdir/toc/ecip064/2005034358.html>
- Katz, Ephraim, Fred Klein, and Ronald D. Nolen. *The Film Encyclopedia*. 4th ed. New York: HarperCollins, 2001.
- Lyman, Rick. *Watching Movies: The Biggest Names in Cinema Talk About the Films That Matter Most*. New York: Time Books, 2003.
- McCarthy, Kevin F. et al. *The Performing Arts in a New Era*. Santa Monica, CA: Rand Corporation, 2001. Supported by the Pew Charitable Trust.
http://www.pewtrusts.com/pdf/cul_rand.pdf
- Rhodes, Gary D. and John Parris Springer, eds. *Docufictions: Essays on the Intersection of Documentary and Fictional Filmmaking*. Jefferson, NC: McFarland, 2006.
Table of Contents: <http://www.loc.gov/catdir/toc/ecip0512/2005012767.html>
- Rollins, Peter C. and John E. O'Connor, eds. *Hollywood's West: The American Frontier in Film, Television, and History*. Lexington: University Press of Kentucky, 2005.
Table of Contents: <http://www.loc.gov/catdir/toc/ecip0514/2005018026.html>
- Trumppour, John. *Selling Hollywood to the World: U.S. and European Struggles for Mastery of the Global Film Industry, 1920-1950*. Cambridge, UK; New York: Cambridge University, 2002.
<http://www.loc.gov/catdir/description/cam022/2001037562.html>
- Turner, Graeme. *Film as Social Practice*. 4th ed. New York: Routledge, 2006.
<http://www.loc.gov/catdir/enhancements/fy0654/2005030194-d.html>
- Vaughn, Stephen. *Freedom and Entertainment: Rating the Movies in an Age of New Media*. New York: Cambridge University, 2006.
<http://www.loc.gov/catdir/enhancements/fy0633/2005001236-d.html>

The U.S. Department of State assumes no responsibility for the content and availability of the resources listed above. All Internet links were active as of May 2007.

役に立つウェブサイト

American Film Institute

AFI is a national institute providing leadership in screen education and the recognition and celebration of excellence in the art of film, television, and digital media.

<http://www.afi.com/Docs/about/press/2007/100movies07.pdf>

AFI Silver Theatre and Cultural Center

Presents a variety of film and video programming, augmented by filmmaker interviews, panels, discussions, musical performances, and other events that place the art on-screen in a broader cultural context.

<http://www.afi.com/silver/new/default.aspx>

Billboard

An international newsweekly of music, video, and home entertainment.

<http://www.billboard.com>

Bloom

MTV and OneDotZero have launched Bloom, a competition to find the best up-and-coming moving image talent from around the world and to commission a series of one-minute films that explore identity and community.

<http://www.mtvonedotzero.com>

Film and History

Published since 1970, *Film and History: An Interdisciplinary Journal of Film and Television Studies* is concerned with the impact of motion pictures on our society. Also, *Film and History* focuses on how feature films and documentary films both represent and interpret history.

<http://www.filmandhistory.org>

Film Schools

Features basic information about each school's program, often including opinions or evaluations submitted by students and others.

<http://film schools browse.htm>

Film Society of Lincoln Center

"America's pre-eminent film presentation organization, The Film Society of Lincoln Center was founded in 1969 to celebrate American and international cinema, to recognize and support new filmmakers, and to enhance awareness, accessibility and understanding of the art among a

broad and diverse filmgoing audience."
<http://www.filmlinc.com/about/about.htm>

History of the Academy Awards
<http://www.oscars.org/aboutacademyawards/history01.html>

Internet Movie Database
<http://us.imdb.com>

Motion Picture Association of America (MPAA)
<http://www.mpaa.org>

Movie Preview Sites
Offers comprehensive information on the film industry, including bios, movie trailers, latest information, and news and gossip.
<http://trailers.htm>

National Film Preservation Foundation
The National Film Preservation Foundation (NFPF) is the nonprofit organization created by the U.S. Congress to help save America's film heritage. It supports activities nationwide that preserve American films and improve film access for study, education, and exhibition.
<http://www.filmpreservation.org>

Script P.I.M.P. (Script Pipeline Into Motion Pictures)
This site contains information about how to submit screenplays, how to get script coaching, how to sign up for the newsletter or competitions, and how to search databases for a script. It also has information about film school options with links to individual schools and colleges that offer screenwriting or film programs.
http://www.scriptpimp.com/show_me/film_schools/

The U.S. Department of State assumes no responsibility for the content and availability of the resources listed above, all of which were active as of May 2007.